

天に行われるとおりに地にも行われますように

——フィリピンの状況で神に向かうこと

ブレンダン・ラヴェット著

目次

序文 (Preface)

はじめに (Introduction)

第1章 われらのための神秘

神のもとにある人間社会・失敗したイスラエルのプロジェクト・しもべ

出エジプト

軌跡

しもべ
僕

イエス

教会

神の世にある有効性

第2章 神に向かうこと

完全な人間の善を進める

価値の基準

第3章 教会であることの意味

文化の中心性

パウロ6世と社会的教説の展開

文化的プロセスと人間の生存

貧困層に対する優遇的選択の妥当性

文化的価値と基本となる教会共同体

完全不可欠な霊性

神の立つところに立つ

結びの要約

付録

第一部 悪の不思議に対する神の解決策

旧約聖書の啓示の頂点

第二部 人間の完全不可欠な善の価値基準

価値の観念

可能にするものとしての限界

いのちの動き

価値基準を十分に拡大すること

結論

序文

本書の中心は基本的な司牧の方針についての講演で、ミンダナオ島＝スルー諸島教区司祭の何人かに聴かせたものである。私の関心で、彼らの関心でもあることは、世界の人々のために教会の司牧が有効性をもつかどうか批判的に熟考するところにあった。講演のもつ性格から解説のための詳細な脚注は適さないし、脚注の使用を正当化することも妥当ではない。また講演対象の地域状況から離れ過ぎてしまうことも、その考え方がはるかに広範な状況に適用されるときも、許されることではない。こうしたことをすべて考慮した結果、講演に向けた準備として私が入念に作成した原稿は、講演そのものとはかなり異なるものになった。

もし話したことをそのまま出版するつもりであったなら、問題はなかっただろう。しかし読者はこの講演の主張の背後にある基礎的批判的見方というようなものを知っているべきだろうと私は思う。そしてそれを提供する責任を私は感じている。

どのようにこの困難を解決したか。私は自分の経歴書の一般紹介部分を講演の「はじめに」として使用した。そして経歴書の残りを本書の「付録」に収めた。講演と、「付録」内容の間には明確な構造的並行関係があるので、本書を手にする読者のさらなる探求を助けている。著者が読者をそこまで引き込めるかにかかっているが。

講演と付録は基本的に同じ分野を扱っているが、望ましくないほどの繰り返しになってはいないと思う。要約する度に違う、より明快な論述になっているという信念があるからである（その例は、価値基準の9段階の提示）。馴染みのない、複雑な事項説明を多様に幾重にも成すことの利点は明らかである。

講演と経歴書を統合して調和のある一冊の書物にすることは理論的に可能であるが、そのような統合の試みには筆者に与えられている以上の時間を要するだろう。私のそのような試みがこの世になくて済むなら、神の佳き摂理の現れなのであろう。

講演録音のテープ起こしと本書の初稿編集にあたったペルラ・ヤップとブレダ・ヌーナンに深く感謝する。

1988年、オザミス・シティにて

はじめに

過去12年間、フィリピンでの公正な社会実現のため奮闘中の教会関係諸グループは驚くべき活力と創造力を発揮してきた。戒厳令下で、フィリピン階層社会の無視できない少数派（10年でカトリック司教会議の五分の一から三分の一になった）と、さらに無視で

きない修道者の少数派は、増大する抑圧にも関わらず、預言者の教会になるというチャレンジを受け入れた。社会に行われている不正に対抗するため様々の特別チームが結成された。教会の構造も創造的に修正され、教会を真の参加の場所と神聖な共同体の力とみなすようになった。そのようなイニシアチブによって生み出された状況の中で、1986年マルコス政権崩壊までには人権問題中心の世俗的運動がかなり活発になっていた（注1）。そのような創造的動きがここにきて消えていく兆候がある。こうしたグループの信仰の要求とその後続く者の道筋は同一と考えられたことが、その運動を支えたのではないかという推測には頷ける。もしこれがそうした取組みの背後に働く精神的な力なら、信仰の要求と後続く者の道筋を同一とする考えを弱めることこそ、そうしたグループの弱体化につながったかもしれない。信仰の要求か、後から追う道筋のいずれかから混乱や当惑が起きうる。源が何であれ、混乱や当惑があれば根本的に後続く者はなくなる。

本書はそうした混乱を一掃するため、人間の完全な善のダイナミクスを良く理解できるよう助けるものである。本書は上述の混乱の二つの源に対応する、二つの大きな部分で構成する。第1章は教会が則って活動すべき「十字架の法（Law of the Cross）」に光を当てることをテーマにする。続いて第2章では、この法に従って生きることは完全な人間の善のダイナミクスへの閃きを要求するという認識を扱い、こうしたダイナミクスの解明をテーマとする。十字架の法の下でのいのちの実現は、人間と地球の関係および人間同士の関係における統合的な価値基準を確立する、つまり社会的基礎構造と社会の文化的上部構造の適切な関係を確立するという具体的な使命のうちにある。これは歴史的救済のダイナミクスと、そうした救済プロセス関与においてたどるべき具体的道筋を明らかにするのに役立つだろう。第3章は教会であることにとっての、これらすべての意味合いを詳述する。本書で私が述べようとする前進の本質について、現在の状況と関連付けて提示できれば読者の助けになることだろう。

グローバルな状況との関係

注意を向けるべきなのはグローバルな状況で、これが主要な事情背景となっているに違いない。現在ほとんどあらゆる地域、あらゆる文化の土台は、第一にグローバルな経済構造条件によって定義される。こうした中で、フィリピンは支配的な世界システムとの関係では周縁的状况にあると理解される（注2）。そこに何も新しいことはない。しかし新しいのは、この状況との関連で、信仰の要求をこれまでよりずっと厳密な方法で仲介する必要があると認識していることである。われわれに現代文化批評の規範的な基盤が欠落している限り、こうした認識はあり得なかった。評価できる文化解釈学なくして、公共政策の基礎として理解されうる文化の神学をわれわれはもちえなかった。そうした規範的基盤を発展させたのは、故バーナード・ロナガンのライフワークを広めてきたロバート・ドーランの貢献だ（注3）。社会秩序における信仰の要求を説明するのに必要な批判的基盤をわれわれはもたなかったが、今はある。次にいくつかの関連事項を挙げる。

以前の統合との関係

1976年バギオでのFERESセミナーを振り返ると（注4）、そこに過去十年の創造性にとって重要な貢献となる瞬間が見えるとするは不的確とは言えないだろう。セミナーは多くの人々に社会分析の道具を用意した。その道具を用いることで、自分たちが責任をもって召し出されていると人々の感じる世界の構造が明確にされた。さて、この「はじめに」の冒頭で掲げた混乱の状況において、特別な意味合いの建設的な道具が求められているようにみえる。この道具は、以前の道具が優れて役立つ分野、すなわち稼働中のシステムの経済・政治分析では太刀打ちできないだろう。むしろ、健全な社会を構成するものを明らかにすることで以前の分析を補完する。そしてこれも完全な人間の善というモデルによるものである。

このような明確化の必要性は見逃されることがよくある。しかし自分たちが手にしようともがいている善のあるべき形は誰にでもわかっているという思い込みは、これまでも今も、われわれ自身の応えのありかたを左右し、自分たちの戦う悪そのものの構造へとつながる。悪を同定することだけでは、創造的な応えを示せない。マルクスの場合にありがちなように、病的な社会存在とともに働くことによって、病的状況の事実を法の地位にまでもたすようわれわれは促される。われわれはそこで、悪に支配されるレベルでの悪に対する闘争にすっかり結び付けられていることを発見する。悪と戦うそのような還元主義的戦略はすでに自滅的である。本書で鍵となる戦略は、レベルの各層と、不可欠な人間の善の複雑な相互作用の概要を述べることである。それがうまくいく範囲で、二つのことが起こる。

- 一 克服すべき社会悪の様々な側面をより正確に確認する
- 一 状況回復のためのより効果的な戦略

このモデルの中心は、人間文化の真のダイナミクスと重要性を改めて発見・把握することである。このカテゴリーあるいは混乱、これを革命の文脈で扱おうとする思索家たちにまで取り込まれる混乱を些細なこととする動きは、乗り越えなければならない。アルゼンチン生まれの小説家・政治コラムニスト、アリエル・ドーフマンは1973年の「ピノチェト将軍率いる軍部の」チリ・クーデターについての最近の発言で「チリで敗北があったとしたら、それはわれわれの政治的文化的敗北だ。われわれの国とは本当にどういうものかを反映する対話のことばを創造できなかったという意味での敗北だ。私はピノチェトに石を投げるなどと言っているのではない。ただ、たとえばマッチョなどで危機の深い原因を矯正するなど自分で信じ込まないようにするのだ。私は物事を日常の現実の中で理解したいし、われわれのじゃまをする神話と、われわれ自身を浄化するために創らねばならない神話を見つけないのだ」と吐露している（注5）。

社会的教説で正しい社会の追求においてこの要因が中心となることを主張するため、教会は適切なカテゴリーを見つけようと20年以上も努めてきた（注6）。教皇ヨハネ・パウロ〔2世〕は文化について、個人の最も深いレベルの位置から国家やグローバルな様相に至るまで分析している。あらゆる文化の進展は思考することと愛することに根ざしていると考えられる。それは自由から起こり、発展するためには抑圧のないシステムを必要とする。対照的に、先進工業文化は徹底的にイデオロギー的で、利益最大化の経済的理由であれ政治支配のためであれ、大衆を管理・幻惑・操作する方法を発展させてきた。個人はそこで非個人にされてしまうので、キリストへの忠誠が要求するのは、人々が自分自身の苦境ならびに国とグローバルのレベルでの社会の窮状に目覚めるよう教会が働きかけることなのだ。

そのような取組み（注7）の教皇支持者たちによる受入れを阻止しているのは、統合的モデルの欠如である。

そこで何が起きているか。教皇・司教による講話・文書等で抑圧的政治経済構造を明確に非難するにも関わらず、文化について新たに強調することはこうした構造への関心をそらすものとみられ、そのための創造的な閃きはあっさり拒絶されてしまう。

発展する解放の神学との関係

解放の神学で着実に進行中の作業は、その信仰の原初的閃きを批判的に基礎づけ、非本質的事項（extrinsicism：人間の歴史的経験と無関係のカテゴリーを用いること）とされる非難が掲げられないようにすることである。それに反する提案者による修辭的言辭にも関わらず（注8）、解放の神学の貴重な達成は、理性と信仰の弁証法的関係の可能性を解説するところにある。

本論で採用した方法論的神学（methodical theology）は、解放の神学が提供するキリスト者の行いにとっての積極的な規定を、その行いの主体の自己発見・把握において基礎づけるのを助けるものである。そのような批判的基礎づけは、恣意的であるという理由での解放の神学への攻撃を克服するであろう（注9）。そのような批判的基礎づけがなければ、なぜ神が貧しい者たちを好まれるかなどを把握するのは不可能である。なぜなら聖書のカテゴリー（例えば神の国）と、真理と生きる意味をわれわれ自身探し求めるという生来の規範的ダイナミクスとの関連をわれわれがわかることはないからである。

全5巻予定のキリスト論研究のうち最近出版された第3巻でファン・ルイス・セグンドが強く主張するのは、解放の神学を奉ずる者たちがキリスト論の政治的要点を独占的に使用したために歴史における救いのダイナミクスが不十分にしか理解されていないということである。そして同様にそれが不適切な行いと、その結果としての落胆につながっている（注10）。本論で展開されるモデルによって、われわれの信仰の核としてキリスト論の政治的手がかりが必要であること、そしてそれが不適切であることの双方が明らかにされるべきである。もしそれがうまくいくなら人々の中に、複雑で歴史的に終りのない奮闘のた

めに信仰の力が自由に動くよう助けることだろう。結局のところそれこそ必要なことである。

適切な福音伝道との関係

この最後の点では、現在フィリピンで決定的に必要なのは適切な福音伝道であるという趣旨のフランソワ・ウタールの最近の提案に触れる。ここでかなり明白なのは、福音は自由の束縛と罪という具体的な歴史的経験との関係で伝道されなければならないという点だ。適合性 (adequacy) に欠ける現代の状況を分析すればどれも、よそよそしい福音伝道にしかつながらないし、それは希望の立脚点をなくすことで、結果として長い目で見れば人々の幻滅につながる。唯一の完全な福音伝道はこの適合性 (adequacy) のレベルに達することこそ私は主張する。

講演と近似した状況

ディポログ、オザミス、パガディアン、イリガン、マラウィの各教区 (D.O.P.I.M.) は多年にわたり共同で司牧の展望と目的の改善に努めてきた。近年合意したのは、貧しい者たちを優先的に選び取っていくための主要な手段として基本的な教会共同体の構築に焦点を絞ることである。本書はそのような焦点を成り立たせる神学と霊性の双方を探求するためのものである。

1987年のイリガンの年次会合の準備として、D.O.P.I.M. 全域調査が行われ、結果はその最初の段階で会議参加者に知らされた。調査の際立った部分は基本的な教会共同体に対する人々の姿勢に触れたところだった。その結果が示したのは、回答者の12.5パーセントがそのような共同体に所属・関与していることのうちにキリスト者としての自己理解を見ていたことだ。若い司祭の多くはわずかの人々しか共同体支持や所属を表わさなかったことに落胆した。これほど多くの時間と努力が基本共同体促進のために注入されたのだからもっと高い数字が出てよいのにと感じていた。このような落胆は妥当とはいえない。

ここで必要なのは歴史的見地である。もちろん教会の新しいあり方について近年多くの議論があったし、司牧の方法としてラテンアメリカの教会で開始されたことが教会権威の最高レベルから支持されていたのも真実だ。これは十年このかた真実である。しかし貧しい者たちの優遇的選択と、その選択に伴う教会のあり方の司牧的理解を公的に認めるには、なされなければならない多くのことがあった。教会がその進むべき方向を見つけることができるならそれは疑いなく神の恵みによる奇跡である。だが教会がその選択を実行し、教会が自ら見つけた、進むべき方向へと司牧的にたどることは、桁の違う大きさの恵みによる奇跡である。

ここでの問題は、司牧の行いと、その行いの背後に何世紀にもわたる組織的な重みがあるという思い込みを逆転させることである。この逆転はすぐ、たやすく起こることはない。実際われわれの世界的教会制度の中では、基本的教会共同体が発展する中で貧者の優遇的

選択を実施することに関わるという、教会の現実の変容に踏み出した教会はほとんどない。こうした視点では、D.O.P.I.Mの若い教区でこうした共同体がかなりの程度成立してきたことは、失望ではなく本当に喜ばしいことの根拠なのである。

私は次の神学的考察でさらに励みになることを述べたいと思う。われわれが神を正しく捉えるなら、この世界で神がおられるところを見て、この世界で神がどのように働いておられるかを見るなら、それに対してどのように応えるべきか知るための道の大半を歩んでいるのだ。神が歴史の中でなさっていることが見えないなら、どのような霊性も働くことはできないだろう。

われわれの救いは、歴史の中で働いている神秘のダイナミクスの中に取り込まれていくことにある。人と人との関係を通してこそ、共に生きることが人間の善の要素と直接つながる。御父の愛は、イエスの到来における人としての御子に向けられる。われわれに救いをもたらすため、神はわれわれの孤独を癒すとともに、秩序という人間の善を変容させ有限だが超自然の秩序という善へと統合しなければならない。そこで次に来ることは二つの主要部分になるが、その分け方は強調されるものではない。まず歴史の中で神がなされることを聖書のことばから省察し、次に神の歴史の中の行いへの応えとして仕えるべき完全な人間の善の形について詳細に論述する。

脚注

1. フィリピンのカトリック教会でかなりの部分が段階的に急進化した詳細は、一時的な文書でしか見られない。フィリピン国外の読者はブリュッセルのプロ・ムンディ・ヴィタが広めている、入手しやすい会報や関係書類を熟読することで教会状況の経過についてある程度感触を得ることができるだろう。まず1970年の広報『フィリピン』第30号から始めて次にアジア・オーストラリア・ファイル第4号『フィリピン—戒厳令下の5年間』（1977）、第17号『フィリピンの教会と国家』（1981）、第21号『人々の活動』（1982）、第23号『権威主義と開発』（1982）、第34号『現地の教会と闘争的信徒の参加』（1985）、第37・38号『民衆の力とキロワット—フィリピンの終らない革命』（1986）がある。1965年から80年代半ばのフィリピンの教会急進化についてバランスの取れた概観は、パリグ・ディガン著『教会論争—アジアのキリスト者による社会抗議行動』（ニューヨーク、オルビスブックス、1984）があり、特に106-119ページ参照。戒厳令下の最初の3年間における教会と国家の関係についてはデビッド・A・ローゼンバーグ編『マルコスとフィリピンの戒厳令』（イサカ、コーネル大学出版局、1989）付録13で、この中の5つの章は教会の変わる立場の背景をよく描いている。参考となる背景説明はアルフレッド・W・マッコイ著『試練にある司祭たち』（リングウッド、オーストラリア、ペンギンブックス、1984）と彼の寄稿するマッコイ/デ・ヘスス編『フィリピンの社会歴史』（マニラ、アテネオ・デ・マニラ大学出版局、1986）にもある。198

6年2月の出来事〔マルコス失脚とコラソン・アキノ大統領誕生〕への教会関与を分析したのはアレヴァロ、ランビーノ、キャロル他著『フィリピン革命の「奇跡」——学際的考察』（マニラ、ロヨラ・ハウス研究所、1986）。どちらかといえば批判的評価といえるのが、バトゥン、バウティスタ編『宗教と社会——闘争の神学へと向かって』（マニラ、FIDES、1988）、79-106ページ。

2. 簡単に要約した議論としては拙著『死の前の生』（ケソン・シティ、クレアシャン出版、1986）、第2-3章がある。また最近ではサミール・アミン著『周縁地域での民主主義と国家戦略』（「季刊第三世界」第9巻第4号1987年10月、1129-1156ページ）。アミンは周縁の国家で民主主義のために支払うべき代価は、「国家ブルジョワジー」プロジェクトを放棄して「民衆のための国」プロジェクトを選ぶことだと論ずる。
3. 言及するドーランの主著は『精神の回心と神学的基礎 - 人間科学の方向転換を目指して』（チコ、カリフォルニア、スカラズ・プレス、1981）、『苦しむしもべであることとその価値基準』（「ロナガン・ワークショップ」第4巻41-67、1983）、『国際都市のための教育』（「メソッド——ジャーナル・オブ・ロナガン・スタディーズ」第1巻第2号137-157ページ）、『精神の回心から共同体の弁証法へ』（「ロナガン・ワークショップ」第6巻85-106ページ）。またダレル・J・ファッシング『神学と公共政策——セグンド、エリユール、ドーランの研究の方法』（「メソッド」第5巻第1号、1987年3月、41-91ページ）も参照のこと。
4. フランソワ・ウタール他『アジアの宗教と発展——キリスト教的省察をもった社会学的アプローチ』（バギオ、FERES、1976）
5. 「サウス」1987年10月、97ページ。Cp. リチャード・フォーク著『危険と闘争の世界における平和と正義への糸口』（IFDA ドシエ62、1987年12月、17-36ページ）
6. 全体の展開について有益な分析調査は、ポール・サーリス『教皇教導権における社会正義とインカルチュレーションの関係』ITQ 第52巻第4号参照。
7. イヌイットとオーストラリア原住民が恐らく例外の可能性があった。彼らはこうした方向での最近の試みの契機となり、狙いとされることを正確に知るための、文化的一貫性が依然として保全されていた。
8. 例えばヨン・ソブリノ『岐路にあるキリスト論』（ニューヨーク、オルビス・ブックス）221-222、349-350、370ページ。
9. A・フィエーロ『闘争的福音』
10. 『聖パウロのヒューマニスト・キリスト論』（ニューヨーク、オルビス・ブックス）145-182ページ

第1章

われらのための神秘

神のもとにある人間社会・失敗したイスラエルのプロジェクト・僕^{しもべ}

歴史の中の神の行いについて洞察を得るために聖書を見ることにする。誰でも聖書物語の流れに親しんでいる。これらの物語を理解するために何より必要なのは、支配的力に治められるものとしての世界の感覚であろう。支配的力は帝国主義的力である。それは人々を振り回し、敵を排除する力で、自らを偉大で畏れるべき存在と主張する力である。帝国主義論理の中心であり、世界は人々の記憶する限りこの論理で形作られてきた。

出エジプト

この物語は帝国主義的力による犠牲者、エジプトで抑圧された人々で始まる。神は彼らの解放を意図する者として発見される。そしてこの神は帝国主義的秩序から脱出する動きの中に発見される。どこへの脱出か。それが問題だった。脱出して辿り着くのはもちろん砂漠である。砂漠では何が起きているのかわからない。道しるべもない。自分で考えなければならないリスクがある。方向を選択しなければならない。これが自由のリスクで、人々は世界をどう形成するか代替りの方法について責任を取らなければならない。出エジプト記のほとんど全ページで見つかるのは、人々がこの召出しの受入れには不本意であることを堂々と表わす記述である。帝国主義的な抑圧的で死も免れさせぬ力と、帝国が疑いなく用意した奴隷の慰めに対して、内面化された偏見を克服する莫大な創造性が求められる。つまりエジプトの歓楽への帰還というテーマである。

軌跡

最近の研究（注1）では紀元前1250年から1000年までの期間をこの民族が最もうまく代替りのやり方で社会を組織した時期とみる。しかしこの当初の時期の約束が何であれ、続くことはなかった。失敗したイスラエルのプロジェクトの形は、帝国主義的力の反転だった。解放する神の下で社会を形作るよう奮闘する代わりに、人々は周囲の各社会の闘争的構造を模倣する誘惑に負けてしまった。神の民は確かに力ある民とされた。それはダビデでひどい始まり方をして次第にさらに悪くなる物語である。その民族は民衆にとっては結果的に悲惨を伴うような力の同盟の継続に民族を縛り付けてしまう。すでにダビデ朝の下で抑圧は制度化されていた。ソロモンの頃には、民衆の奴隷化の意味でエジプトでの時代を喚起する状況だった。しかしこの奴隷化は今や民族の安全保障と国家強化に益するものであった。

預言者たちはその運命の墮落に関心を向けた（注2）。しかしその過程は容赦なかった。紀元前6世紀に全くの崩壊が起り、人々は無条件の奴隷状態に戻ってしまった。今度はエジプトではなくバビロンだった。事態は繰り返して元に戻ったようだった。

しかしそのように言うてしまうことは、物語の一番重要な側面を無視することだった。その側面とは、この民族がゆっくりと痛みを感じつつ、歴史の中で神に対するということはどういう意味かを把握するようになったという学びのプロセスである。自分たちが自由でいるためには絶え間ない努力を要することを学んだ。特に、死に至らしめるような帝国主義的力を目指す文化的偏見に向かって抵抗しおおせるためには、莫大な創造性が必要である。そのような莫大な努力は可能とは見えなかった。この苦境から出てきたのが、歴史の中の神とはどのような存在かについての新しい驚くべき理解だった。

しもべ 僕

バビロン捕囚の間、第二イザヤと呼ばれる名前のわからない詩人が、「苦しむしもべの歌」とされる一連の詩の中でこの新しく驚くべき展望について述べた。この詩は人類の文学のなかで比類ないものである。しもべとは、歴史の中の神に向かう者の姿である。帝国主義的力の行き詰まる政治とは反対に、しもべは悪をもって悪に対することを拒絶する。しもべはその考えられないことをする。前進する道とは民族が歴史的悪を身に引き受け好転させることであることを彼は示す。その代償は人々の顔をしもべの出現から顔をそむけさせることになった。

問題なのはまさに悪の神秘に対する神の解決法である。歴史の悪の不思議には神の解決法が確かにあり、教会がそれを把握することは極めて重要である。それができないと、人々は自分たちの精神面をランボー [米映画の破壊的ヒーロー] のようなイメージの破壊的全能幻想の中で増強させるだけで、どこにも導かれなくなる。精神的資源、それはわれわれを命に向けて、そして命において方向づけるイメージであり、われわれの創造性の限界を形成する。自ら破壊的報復モデルを糧とするなら、自分たちが憎むものの論理に永遠に囚われることになる。それはわれわれの憎むものになることである。

しかし神がわれわれにとってどういう存在かという中心的啓示を真剣に考えることは容易ではない。この同じ神が、人々を歴史の中の神秘に向かうよう招いている。神の解決法の形は、報復で返すことなく悪を吸収する包容力である。これが歴史の中の神の真理である。宇宙の最も深い真理としては、前進する唯一の道である。それ以外、人々のためにも世界にも希望はありえない。誰かがこれを信じなければならない。しもべの歌は神に召出された民族がこの役割の中で自分たちの運命を見つけるよう示唆する。教会が存在するのは歴史的悪に対するこの神の解決法を具現化するためだけである。

帝国の論理の下では、人々は自分たちの敵すべてを滅ぼす神の姿を受け入れていた。人々が明白にあるいは暗に、そのような神の姿をどれほど変わらず受け入れているかを甘く見ては誤りになる。人々の敵が誰かを見定めて殺せばよい、そうすれば良い社会を築き始められる。そのような立場は、神がわれわれの世界でしようとしていること、つまりユダヤーキリスト教の中心的な啓示から支援を得ることは一切ない。(民を象徴する)しもべは、帝国の敵対する勢力同士が形作る世界の中で、自らの務めを遂行しなければならない。そ

れこそがまさに彼の務めをわれわれには信じがたいものになっている。しもべの使命は悪が滅ぼされた世界で生き抜いていくことではない。悪があり続ける世界で生き抜いていくことである。もし、しもべにこのような状況下で使命を果たす覚悟がないなら、歴史的な救済はまったくなくなるだろう。だからしもべの歌は、嘲りにさらされるしもべを示すのだ。しもべは滑稽で哀れなばかりらしい存在として見なされる。なぜなら、われわれの文化で人間的意味があるとされるカテゴリーでは、しもべが召出されて行うようなことはばかばかしく、しもべ自身の苦難と死に関わることだからである。神の驚くべき、命を与える真理は、そのような文化を覆そうというしもべの歌のあり方にあきらかである。人々は、他の代わりとなって受けるこの苦難の物語に待望される自身の癒しのダイナミクスを認めるのである。死ではなく、いのちのためだけにこらえるしもべは人々の敵意を非難せず悪をもっての報復を拒否するが、そのしもべの生き方において、人々はいのちのための場所、つまり平和のための場所が誰に対しても開かれることを知った。しかししもべの歌のその真理を認めることがあっても、しもべの歌は歌のままだった。それを歌う歌い手は足りなかったのだ。

イエス

しもべの歌に命をあたえる神の真理を認めてもこの真理をどのように実現するかわからないまま、人々は自分たちの伝統の中の貴重な部分であるやっとなしした洞察力を持ち続けていた。それはヘブライ語聖書の一部、少数の者にとって最も大事なものとなった。イエス来臨の意義は、彼がしもべの歌に血肉を与えたことだ。聖書のハイライトは第二イザヤに見つけるべきという上記の主張の言いたいのは、イエスは新しいメッセージをもたらしたというのではなく、新しいメッセージを実現したということだ。イエスだけがしもべの歌を歌うことができ、それをわれわれにとって信じられる真理とすることができた。歴史の中の神秘に対する真の信仰は、しもべの務めを果たすことのできる唯一人の者において示されている。

教会

このキリスト論に従うと、教会はこの世でしもべの道をたどることを選んだ民のからだに過ぎない。教会は、命のために進んで苦しむ者たちの歴史のうちにある動きであり、悪と不正に直面していく——どんな敵対者があっても、しもべは自分の顔を決してそむけないからである——正義が地上に確立するまでは。

明らかになっている公的教えでは、正義を支持することが福音宣教を構成するひとつの側面であると、教会は1971年まで述べたことがなかった。それを明らかに述べるこの意味はあまりに大きいので、広範な教会組織の中でまだ試されているところである。命への歴史的な不正に対抗する人々から離れたところでキリスト教はありえないし、救いもありえない、真のキリスト教共同体もありえない。悪のすべてをよそに命を助けるために

もがく神秘であるイエス、彼において開かれた神をわれわれが信じるようになるなら、もしわれわれが、この世においてこの世のために神のおられるところに立つ覚悟があるなら、次の重要な問題はわれわれの世界のどこで、そしていかに、命が脅威にさらされているのかを明確にすることであろう。

神の世にある有効性

罪深い世にあつて命のために戦うなら、何が有効かについてわれわれの通常の意味の理解に革命的变化がある。命の神への信仰によって生きることは、歴史的結果がどうであれ、正しいことをすることである。何か別の神の信仰に生きる場合、うまくゆきそうに見えれば正しいことをする。イエスの生涯に反映されている、歴史の中での神の行為の有効性は、われわれにとって日常の意味の有効性ではほとんど計ることはない。このことはローランド・ジョフィ監督の最近の映画『ミッション』（1986）に心を打つ描かれ方をしている。そのドラマの緊張は歴史のジレンマに対する答えを引き起こす。パラグアイの伝道所を有するイエズス会士たちは、先住民グアラニー族を奴隷制度から守るという方針に固執するとイエズス会へのヨーロッパでの弾圧につながると警告される。弾圧は将来誰も助けることができなくなり、将来どこの人々に対しても有効に働くことができないことを意味する。ポルトガル人とスペイン人はグアラニー族を奴隷として使いたいと思いで全く一致していた。イエズス会が生き残るためには、イエズス会士たちが仕えたいと奮闘していた人々を犠牲にしなくてはならなかった。

歴史のアイロニーは、貧しい者たちを犠牲にしたことで、イエズス会士たちが回避しようとしていた事態がどのみち起きてしまったことだ。ご都合主義の論理に従うことは貧しい者たちを救わず、イエズス会は弾圧された。イエズス会士たちの行いは彼ら自身の運命を左右しなかった。虐殺され奴隷にされたグアラニー族の運命には甚大な影響をもたらした。

そこで問題は、神の世界で本当に有効なことを見極めることである。神秘のしもべであるイエスの行為に注意を向けると、有効なことはたとえ死に直面していても命を促進することなのがある。この点に達するのはたいへん重要だが、探求の目的ではない。さらに開かれる必要があるのは「命の促進」という語句にこめられたことだ。命がどのように促進されるべきか判断することはたやすく自明であるように見え、実際にそうであることは多い。たとえば人の痛みや欠乏といった個別のケースが眼前にある場合だ。しかし真に広範な規模での命の破壊が、構造的な決定要因に帰する時、それらにどのように対抗するかを知るのは易しくもないし明らかでもない。それには、人間の善の説明モデルが必要である。あらゆる歴史的状況下でわれわれを命の促進へと駆り立てることができるモデルである（注3）。

ここまでの議論を要約してみよう。しもべの道をたどること、この世の癒しのための神の贖いの行いに参与することは、善を以って悪を克服するよう学ぶことである。敵を愛す

ることは疑いなく福音メッセージの中心である。それこそ教会という活動にアイデンティティを与えるものである。だが悪を悪で返さないようにできる唯一のものは、耐え忍ばれる悪以外に焦点を置くことで維持される。われわれの焦点が歴史的悪なら、われわれの反対するもののために必ず腐敗する。そしてわれわれは自分で憎む者になる。これを回避する唯一の方法がある。苦闘の焦点は、克服されるべき敵でなく、戦うべき悪でもない。促進されるべき善である。

しもべの道を歩むことができるのは、命がどうあるべきかという展望が育む精神的エネルギーをもつ人々だけ、命への奮闘の中で何であれ実際に支えていけるという展望を愛し抜く人々だけである。

脚注

1. N・ゴットワルト『ヤハウエの部族たち』（ニューヨーク、オルビス・ブックス1979）参照。
2. ある重要な点で預言者たちが、教会であることの古いモデルと呼ばれるものに属していることに注意したい。預言者たちは王に話しかける。まず人々に向かって自分たちの運命を取り戻すよう促したり話しかけることはない。預言者自身、それほど文化的に権力構造の文化の一部になっているので、制度批判にしても、それ自身が映し出されるようにする。われわれ司祭は預言者と共通の傾向がある。われわれの介入様式は解放の切望される目標とは矛盾する。
3. ちなみに、人間の善の説明モデルは回答を用意するものではない。回答がわかっていると主張するのはイデオロギーに特徴的なことである。教会は人々が自分で得られなかった回答は得ていない。教会が存在して促進するのは、人々が正しい回答を創造できるようにさせるダイナミクスである。

第2章

神に向かうこと

完全な人間の善を促進する

命を助けることで歴史の中の悪を克服する神に向かいたいという願いから、命を助けるものはいったい何かをわれわれは調べることになる。その回答は決して明白ではなく、それが第1章を有効性の問題を掲げることで締めくくった理由である。マキャベリ以降（注1）西側世界での政治思想と実践は有用性に支配されてきた。有用性を算定すれば、道徳的に正しいことをする有効性に関しては失望が表わされる。何世紀にもわたるそのような実践面の落胆は、捨て去ることが難しい遺産を伝えてきた。悪は善を促進することで克服されるべきであるという考えは、悪の支配する条件によって悪に応えることに専念してき

た世界ではほとんど理解できない。

しかし福音が禁止する命令を受け入れても、われわれはいったい命を促進するものは何かを見定める課題に直面している。人間の善は価値の多くのレベルから成り立っている。どのひとつのレベルも、もしくはすべてのレベルであっても、われわれの探求への答えなしに記述できるかもしれない。必要なのは、人間の善の説明のための土台である。それは、内的関係によってそれとなく規定された構造としての人間の善の複雑さを理解することである。記述から説明へのこの動きによってのみ、完全な人間の善の中において、価値レベル各層が互いにどう関係するか理解することができる。

価値の基準

人間の善の複雑性は、9段階の価値関与のためである。段階数を多く感じるだろうが、簡単な図を示して各段階の名称を挙げる。

9段階 人間の善の構造

宗教的		上から
		条件付けと実施可能性
個人的	上部構造的	
文化的	-----	
	基礎構造的	
社会的	政治的	
	経済的	
	技術的	
命に関する		
動物に関する		
植物に関する		下から
		差別化と創造性
化学的		
物質的		
	段階間の真の動きは	ひとつのレベルでの真正は
	個人的関係を通してのみ	次に高次のレベルでの真正性を
	起こる	要求する

物質的価値

現時点で、私は図の中に必要以上のデータを紛れ込ませているが、読者のため出発点を準備するという利点がある。もし「差別化と創造性は下から上へと向かう」のが正しいなら、価値の「一番下の」段階が始めるのに適切な場所となる。そしてこの最初の段階の発見と把握は重要である。人間とは、宇宙の出現プロセスが意識に達する箇所である。つまり、われわれは何者かということが宇宙の意識なのである。われわれ自身と、出現した宇宙の200億年の物語が同じものと見なせないなら、人間の善に限りなく接近するのは不可能なままである。完全な人間の善に向かう際のまさに最初の一步は、われわれの根本の真理である宇宙の物語と調和し、それを称えることである。この一步はあたりまえのことではない。これまでかなりの期間、われわれの多くは大量消費・生産の価値を生きてきたが、その価値はわれわれの地上では単純に持続可能ではない。われわれの自己理解は宇宙の犠牲のもとにあったのだ。われわれが厄介な状態にあるのは不思議ではない。客観的にみて、われわれの生き方は地球に属することを否定し、限界ある人間の条件を受け入れることを拒否している。これはわれわれに当然あるはずの霊性を損なうものだ。

化学的価値

ひとつの星が超新星と呼ばれる、一生を終える爆発を起こすとき、周期表の非人造元素すべてが作られる。その価値基準でわれわれ自身を考察することは、出現する宇宙の真理をわれわれ自身の真実として受け入れるというチャレンジに再び会うことである。われわれの地球は40億年ほどの年齢と言われている。生物の形で現れたものは、化学プロセスの絶妙のバランスの実現としてあるレベルで理解される。出現する生物プロセスの中心は、化学的要素の媒介となる組合せの決定だった。このような媒介となる組合せでは、ほとんどの要素が生命のプロセスに入ってきた。われわれが毒と呼ぶものは、時間をかけて実証された適合性から外れている組合せ——あるいは独立した要素——である。このバランスの繊細さを尊重できなければ、有機的に媒介された元素化合物だけが人間の真の食物になる資格があることに気づくことはない。自然は人間をグルタミン酸ナトリウムで養ったりはしないのだ。もしそれを自分で摂取するなら、その人は鬱病になってしまっても驚くべきではない。われわれの食べるものは——運動をするにしても——われわれの感情面を左右する。もっと基本的なのは、あらゆる生き物が空気と水と太陽の光に依存していることだ。これらが毒されたら、すべての命に毒を盛ることになる。

植物的価値

われわれの星、地球の出現の物語では、ブレイクスルーの各段階で生物の次のレベルの基礎が置かれている。生物の最もすぐれた実験工房は確かに熱帯雨林で、われわれの地球

の生物を保存し高めるために必要なデータの大部分がこれらの森林にあることを疑う研究者はほとんどいない。しかし現在そのような森林は保存によって守られる真の豊かさに目をつぶった、信じられないほど鈍感で近視眼的な商業的価値のために取り返しのつかないほど破壊されている。現代の生存の問題は、核兵器による死滅ではなく森林保存の問題としてますます認識されるようになっていく。森林破壊が現在のペースで続けば核のボタンを押すよりはるか以前にすべての命に終りがもたらされる。中米とアマゾン川流域の熱帯雨林破壊を止めようというなら米国の人々はハンバーガー中毒を変えなければならないだろう。ちょうど日本とヨーロッパの人々がより基本的な命の価値を尊重して、広葉樹ベニヤ板に美的喜びを見出さなければならないのと同じだろう。つい20年前までミンダナオの自給自足の部族には自分たちの焼畑や庭での自己栽培・飼育で得る42種以上の食品を有するものがいた。森での狩猟採集により、彼らはさらに62種以上の野生の食物を得た(注2)。世界中の市場圧力のために、すぐれた農業分野の才能がこれまで開発してきた食品の驚くべき多様性がわれわれの世代で確かに消滅しようとしている。見てくれと品質保持期間という市場規格に適合した種類の食品だけが商品として売られる。だが優良で新鮮な食品は長期保存という基準からは望みが消える。そこで人々は防腐剤を使った食品の購入を促される。防腐剤は化学的添加物で、出現してきた植物生態の何十億年にわたる実験においてその出る幕はない。そのように化学的処理を経た「商品」が人間の化学的構成にもたらす影響について深刻な懸念が生じる理由がある。

すでにミンダナオ各地で人々は伐採の影響を見て、森林保護の立場を取っている。激しい洪水を経験し、原因が森林面積の喪失であることを突き止めている。高地の森林は豪雨を「スポンジ」のように吸収し徐々に低地で放つ。森林破壊は貴重な表土に壊滅的影響を与える。熱帯地域の生態がもつ豊かな繁殖力は見せかけになってしまうことになる。そのような生態では種播き後48時間以内に何らかの命のサインが出現する。対照的に温帯地域では命のサインを何週間も待たなくてはならない。この驚くべき現象のため熱帯の繁殖力は無尽蔵ではないかと人々に想像させる。それは危ない幻想である。マックダナが強調するように(注3)地質学的にみてフィリピンは新しい国でその生態はより古い地質構成の土地と比較すれば脆弱なのである。ヨーロッパ人による略奪以前、北米の中央大平原は土地に関しては地球上で最も豊饒な場所で、表土の深さは16フィートもあった。フィリピンで16フィートの深さの表土などという話はめったにない。北米で過去1世紀用いた農耕方法のため土壌の豊かさの半分は失われ、残り半分を守るために緊急対策が現在取られるのみである。明らかに農業ビジネス方式の生産方法導入はフィリピンとその人々の死をもたらすだろう。侵食のほかにも土壌は無機化学肥料や農薬汚染、過剰な灌漑のもたらす塩性化によってその肥沃さを失うことがある。

この価値レベルで獲得するべき人間の善へのさらに重要な洞察は、植物種の多様性に関連している。限定的問題としては商業的に生産性の高い交配種が好まれるために地元原産の種(たね)の種類滅亡・喪失が起きることである。高収量作物の種(たね)の脆弱性

はよく知られているし、次世代で同じ特質を維持してゆかない。大きな問題としては、過酷な天候条件の下で何百万年もかけて自然が行った、生存可能かどうかの決定的実験を無にしてしまうことであり、熱帯雨林の壊滅と関わる。食糧に関して、われわれは気候的に非常に脆弱な交配種に依存することで世界を危機の可能性にさらし、それと同時に生き残った植物野生種の遺伝子プールを破壊していることになる。

動物学的価値

多くの人は、生き物の美しさは生物種の多種多様性に由来するという事実を知っている。命の美しさと、生の真理は一致している。生はただ命の網としてのみ現れる。共生によってしか生存することのできない、互いにつながる命の形なのである。われわれはどれほど多くの〔生物の〕種が存在するのか正確にはわかっていない。しかし余分な種というものはないということを知っている。種というものは一度だけ出現することも知っており、ひとつの種が絶滅したならそれは永遠に失われる。生の出現するプロセスは逆戻りできない。

美は種の間バランスにおいてある。過剰に増殖した種は恐怖の的となる。サイエンスフィクション〔SF〕映画がこうした事柄で満ちているのは、われわれの潜在意識の奥底にそのような感覚があることを示している。出現する生を左右する抑制と均衡（チェックアンドバランス）の働きによってのみ、生が美しいまま存続する。そうした抑制をすべて取り去ったら、一つのウイルスがあつという間に増殖して24時間以内に月にまで達してしまうかもしれない。動植物の生息環境を破壊することによって、われわれは20世紀の十年ごとに加速する割合で種を滅ぼしている。これが人間の生を持続させることにとって何を意味するか誰もわからない。命の網の破壊が遅かれ早かれ人間の生の終焉を意味することは誰もがわかっている。命のあらゆる形——すべては互いにつながっている——の現れを崇敬することは、われわれの生存の条件である。われわれが命へと出現する可能性と、地球というこの星で存在し続けることを支える根拠を構成しているあらゆる被造物を人間以上に抱きしめる命をわれわれが尊重するなら、われわれにできるのは真に人間的なやり方でお互いにつながろうと望むことだけである。

われわれは動物に対して人間との相違点や優越性を強調しがちである。もちろん相違点はある。創世記によれば人間は他の動物すべてに名前を付ける動物である。しかしその内容をよく見る必要がある。人間の使命と尊厳はいったい何によるものか。人々は全世界に何を加えるというのか。まさにこれ、全世界が自らと向き合うということである。命のプロセス全体の不思議さ、つまりあらゆることの無意識の恵みを享受して深く味わうためにわれわれは存在している。残念なことに、われわれは意識をもつようになった世界そのものであるのに、世界に反抗する意識になっているようにみえる。助けて育てるのでなく、略奪する方を選んでしまっているのだ。

命に不可欠な価値

命に不可欠な価値は、健康と体力、恵みと活力の価値であるから良い食物、住まい、適切な養育によって促進される。しかし良い食物を構成するものは、これまで考察した生態的価値レベルを通してしか理解できない。命のこのレベルでなければ人間は直接はっきり見えるようにならないのだが、間接的には先行して考察したレベルすべてで見えていたことははっきりしている。ここまでわれわれが考察してきたのは確かに不可欠な人間の善のレベルであるのは確かである。

命に不可欠な価値に適合することが人間の善の価値のさらに上のレベルすべての基礎になっていると把握するには優れた洞察力は必要ない。食べ物がなければ人は死ぬが、今の世界で莫大な数の人々は食糧がないか、不十分な栄養しか得ていない。その理由は命に不可欠な価値のレベルで理解すべきでない。それは死の計画になってしまっている世界の統治者たちの計画と関わっている。価値基準のはじめの方のレベルを考察することでこの悪の人間に先立つ次元に注目してきた。人間の段階では貧困層、つまり地に呪われた者（ファノンの著書名）が創造される場所にこの悪は姿を現わす。

死ぬことのほかに不十分な食物供給がもたらすのは、能力低下を伴う人間の出現である。人間家族の未来は、何億人もの子どもたちの栄養不良によって、今日われわれの世界のどこであってもプログラム化されている。そのような未来のもつ意味は恐ろしい。未来の人類は必要となる創造性に頼ることができなくなる。人的資源がその幼少期に取り返しのつかないほど損なわれるためである。世界の子どもたちに十分食べさせることができないという現在の失敗の代償をあらゆる人が負うことになる。成人ならかなり長い期間でも飢餓に近いレベルの状態を持続させることができるし、そこからの回復もできる。子どもは成長の初期段階で48時間でも必要な食物を奪われると、ダメージの永続するプロセスが始まってしまうことになる。恒常的な栄養不良の影響は人生の先の段階で修復することはできない。死が取る形は多様で、ゆっくりのものもある。食糧は入手可能であるのだから、人間の死の計画を見るだけでわれわれの状況を理解することができる。

基準の中で価値の各レベルはその実現のために、それぞれその次に高いレベルの真正さに依存している。価値基準の上にも下にも相互の調整がある。そこで次に社会的価値を論ずる。

社会的価値

社会的価値はシステムの秩序の価値である。人々は社会的存在で、その反復して生じるニーズは、秩序の善を人間が促進することでのみ満たされる。しかし秩序の善を促進することは相互に関連する多重なシステムに関わる。社会的価値は、科学技術システム、経済システム、政治・法システムの価値に分化される。大事な留意点は、秩序の善が満たされるべき、人間の生に不可欠な、反復するニーズに言及することで定義されるということである。

a. 科学技術的価値 道具を要する人間には科学技術が常に必要となる。一見、科学技

術の問題は熟考するメリットがほとんどないように思えるが、道具の問題としてしまうからだ。ここで見落としているのは、所与の技術がわれわれの世界と精神にもたらす構造化の影響に関してなのである。今や科学技術は人類を取り囲み、人類のうちで影響を重ねる。正確に言うとならわれわれは科学技術の時代に生きている。「機械崇拜」は現代のあらゆる危機状況への答えとして「科学技術による修正」に優位を与える（注4）。現代科学技術の発展によって莫大な力が高められたが、そうした過程を組織する者、つまり権力者の手に必然的に集中する力である。それは民衆に対抗する形をもつことは避けがたい。ある土地の人々にとって自分ではどうしようもできないところで働く科学技術は、その人々の創造する能力を弱らせる。科学技術が人々に仕えるのではなく、人々が科学技術に仕えることになる。このように考察する時、科学技術的価値をわれわれは価値のさらに高いレベルの基礎として見ている。だが何が合理的な科学技術で何がそうでないかの判断を可能にするためには、価値基準の最初の4つのレベルにも気をつけなければならない。現代の生態破壊の速度は、機械的反復とともに始まる腐敗と直接関係している。機械的反復とは、地球とそこに住む人々の健康と幸せにとって最も破壊的となってしまうまさにその事柄を繰り返す能力で、それは極めて重要な能力とされているのである。適切な科学技術的価値を実現することは、現代の未解決の課題である。

b. 経済的価値 ここで問題とするシステムの価値は、生産と流通の秩序の価値のことで、全人口の生に不可欠なニーズが持続・反復するやり方で確実に満たされることである。人口の一部のニーズしか満たさない経済システムは経済的価値を実現できないし、失敗と判断される。経済的価値は生に不可欠な価値との関連で定義される。利益や価格、市場勢力の観点からは定義されない。

明らかに、ここでは規範的定義が関わる。われわれはこの世界で実際に機能しているものを説明しているのではない。人間の不可欠な善に向かう洞察力だけが——各レベルがどう相互関連するのかという点で——この世界の誤りを独創的に批評・理解することを可能にする。無条件の目標としての利益最大化は、人間の善に反する生産方法を必然的に技術面から選択することになる。世界中で小規模農家を立ち退かせている大規模農業は、農業文化といえない。農業破壊である。このように実施される産業化は地球上で持続可能な選択といえない。支配的世界システムとたもとを分かつことは周辺状況の小さな国々すべての優先事項だ。支配的システムのルールに従って行動し続けることは大多数の周辺国にとって死を意味する。それぞれの地域でその人口に食糧を供給できる、生物学的に自給自足・持続可能な地域を築くことに集中する生物的地域主義こそ、未来に向けて唯一の実行可能な戦略である。

c. 政治的価値 前項の最後の数行ですでに政治システムの価値は暗示されている。生産流通の経済システムは機械的だ。あらゆる種類の要因が経済システムの働きに急激に影響を及ぼすことがありうる。天候のような見極められないものさえある。政治的価値とは、変動する状況の中で経済システムが持続反復する方法で全人口の生存のためのニーズを確

実に満たし続けるシステムの価値である。経済的価値の意味は経済学のうちには見つからないように、政治システムの価値も他の価値レベルとの関係を通して定義されるものだ。経済的価値の場合と同様、われわれの規範的定義とこの世界で実際に生じることとのギャップはあまりにも明白である。人口全体の生存に関わる価値を満たすために政治秩序が経済秩序を支配するが、その代わりに、経済的利害関係者は政治を用いて自分たちの利益を助長しようとする。このギャップの本質については、次に高次な価値レベルである文化的価値の発展の項で意見を述べる。

文化的価値

人間の不可欠な善を明らかにするために展開している説明のための定義と、日常談話で同じ用語がもつ意味の違いについて、私の話のこの段階では読者はもう慣れてこられただろう。ことばの日常の意味は、社会の中で実際に実現されている意味内容を明らかにする。日常の使い方では「文化的」とされることは明らかに周縁的位置にある。文化の重要性が強調されたとしても限定的習慣・慣習への言及とみなされる。人が「文化的事物」について話すとき、現実の中で異なる（より高い）と思われる序列の非文化的事物があるという意味合いが含まれる。われわれが話すことは、文化的プロセスが社会の中心から立ち退かされていることを反映している。

現実世界との橋渡しをしながら人間は意味を創造するが、文化的価値はそうした意味の与える世界をもつ人間において実現される。人類は多様な文化に存在する。これは何を意味するか。それは人間であることの豊かさと現実性が、膨大な創造による達成成果が多様多重に現われていることを指す。しかもその創造による達成のひとつひとつはユニークでかけがえないもので、そのおかげで宇宙の当然とされる事柄が世界の重要性に変化する。

しかし物事とわれわれの理解のこうした方法は豊かになる可能性として受け入れられない。産業・大量消費文化の圧倒的推進力の下では、他のどんな方法も「原始的」で「同族意識的」「古めかしい」とされるか、他の方法の抑圧を正当化し、存在する権利を否定する言葉で貶められる。経済的世界システムの単一文化的帝国主義の力が諸民族の人間性を荒廃させ続ける。最も深い意味におけるプロセスである諸民族の文化を破壊せずにいられない——民族が自分たちのために望ましいのは何か、真に意味のあることは何かを考慮・決定するプロセスのことである。文化的プロセスのこの真の意味こそ、市場勢力で統治される世界では促進されることはありえない。

一つの民族が自らの運命を決定する権利は、確かにその民族の自由にとって不可欠である。自らの運命を決定することが制限され、他民族と同じ方法で消費行動する権利になっ
てしまえば、自由は曲解されたことになる。自分たちを一つの民族として尊重してほしいという要求が、他民族と同様になることで彼らに受け入れられることを意味するなら、もう真の民族主義の意味はわからない。しかし19－20世紀の革命理論のすべてにこの失敗は共通している。解放プロセスにおける文化の中心性の真価を認めることができないと

いう失敗である。この革命理論の理解には、経済と政治の悪に対して有する偏見を把握することが鍵となる。この偏見は無理もないが、見逃してよいものではない。その理論は、現代の世界システム下の社会において経済システムによって政治システムを逆転させることに集中している。起こりつつあるもうひとつの逆転がなければ政治転換は起こりえなかったのに、そこに注意を向けることができていない。それは文化の転換である。人間世界では、人々が政治システムを使って自分たちの世界の経済システムの形についての決定を調停するよう要求する。価値基準の二重の転換が意味するのは、経済的利益を持つ者が政治システムを行使して、人々に必要なのはまさに経済システムが産出するものだと思わせることだ。そう思わせるのに失敗すれば、政治システムによる人々の抑圧につながり、その行為は「国家安全保障」の名分を発動することで正当化される。抑圧的政治権力に直面すると、政治権力の奪取こそ適切な戦略にちがいないと考える者が出てても無理はない。しかし支配装置を奪取するにしてもその勝利は常に過大な犠牲を払うことになり、不健全な傾向を受け継ぐことになる。国民を擁護すると主張する政党なのに人間の善の中心になること、つまり自由のための文化的活動を助けることができないでいる。

レーニンの「何をなすべきか」という問いへの答えはこれだ。人々の判断力・決断力の回復、人々による政治プロセス支配の回復、そしてこれによって経済プロセス支配をも回復することだ。現在の状況は、人間評価の完全性の破綻という特徴がある。政治システムは経済的利益に仕え、経済的利益のために文化価値を支配するよう機能している。そうした状況で、文化プロセスの優位性を回復することが、人間の幸福の促進において不可欠で主要な契機である。われわれの説明モデルの詳細を見てゆく各段階で、教会が命に仕えて生きるということが何を意味するか明確にされていく。出現するはずなのは、共同体の力を促進すること——人々が集まって、自分たちの生き方と世界を創造的に支配しようという気持ちを抱く場所を創ること——が、この世界の癒しとなる存在である教会の活動の中心であるという認識である。

個人的価値

個人的価値は人々の信頼性において実現される。個人的価値は、文化的価値が実現される可能性の条件である。価値を実現するのは創造的な人々であり、価値を彼ら自身のうちに、その環境において実現する。そうして他の人々も同様のことをさせるような励ましやインスピレーションになる。愛し、愛されることで自分も他者もさらに深いレベルの創造性と評価へと向かわせる。

構造的変化は人が創造的になり本物になるのを容易にすることがあるが、創造性は決してもたらさない。個人的価値は、思いやりと賢明さを持ち、合理的で信頼に足るべきという生来の要求に応える人々によって実現される。話に出すこともないほど当然に思えるかもしれないが、簡単に忘れられることだ。人を操ろうとする時や、計画の遂行を人に押しつける時、文化的価値の実現は人々が理性的に自由に参与する範囲でのみ可能であること

を忘れてしまうという罠に落ちる。

個人的価値は文化的活動においてのみ、そしてそれを通してのみ明らかになる。だからたやすく見過ごされるのだろう。しかし個人的価値がなければ、文化は劣化してスラム化する。もし自分自身の感情生活がわかっていなかったら、もし精神面で何が起きているか自分でわからなかったら、そしてそのような精神面のダイナミクスが広範な歴史的原因とどう関わるかを理解しようともしていないなら、私は自分に対しても広い社会に対しても癒しを働きかけることはできない。

自然界に破壊的な歴史的関係のパターンは、人間の精神をひどく損壊する。われわれは精神の力によってかなりの程度生きている。だからもし自分自身の感情生活とよく触れ合っていないなら、生を推進するのに役立つ応答を生み出すことができないだろう。

変革を躊躇する世界で本当の生き方はしばしば悪しき反応を引き起こす。そのような時に悪しき反応にもかかわらず、人生の毎日を生きる上で本物であることを求める要求を継続させるため、われわれはどこで助けを得るべきか。

宗教的価値

宗教的価値は無条件に愛されることのうちにあり、限りなく愛することのできる能力をもたらす。それは限りなく尊重される経験で、善をもって悪を克服し世界の癒しを助けることのできる個人が真正であることを可能にするものだ。それはわれわれの孤独を癒し、もともとあった尊厳を回復し、そうしてわれわれを生きることの自由へと進ませる。宗教的価値は愛する能力のうちに現れる。われわれはこの価値レベルから始まって、価値基準の上から下まで可能にすることの動きについて述べる。宗教的価値は人々の生活の中で機能するためにはっきり指定されなくともよい。しかしこの価値があるからわれわれは創造性を生み出すことができるし、罪が取り除かれるのではなく乗り越えられる世界で、この創造性が常に命を推進するのである。

例えば、生に不可欠な価値のレベルで危機が国に起これば、栄養不良のこどもたちが生じる。先にあげた図によれば、ひとつのレベルで真正であることは次に高度なレベルで真正であることを条件とする。生に不可欠な価値を効果的に広めることは以下の問題をもたらすかもしれない。それは追究すれば社会的価値のレベルで科学技術・経済・政治の新しい制度につながる。こうした制度が真に価値ある秩序の善を推進するためには、共同体の不可欠な弁証法を尊重しなければならない。つまりそのような制度を単純に人々に押しつけることはできない。科学技術・経済・政治の新制度を展開・実施することは、社会のあり方を知らせる文化的価値の変容がなければ、不可能と証明されるかもしれない。もしその新制度の下で持続しないような消費行動パターンに自らのアイデンティティを見つけている人たちがいるなら、人間性の深いレベルでの肯定を経験することだけが彼らを十分に解放して生きる上で必要な変化を把握できるようにする。

上記の例はわずかだが、価値の各レベルがどのように互いのレベルを条件づけるか示し

ている。宗教的価値は、信仰が明らかな人もそうでない人も生に対して愛をもって応えているところに現れる。その応答はどんな時でも価値尺度のうちのどのレベルで生が脅かされているのかによって左右される。生態の被る災難という脅威こそ、今の時代の本物の信仰への主要な挑戦である。命の神への信仰は、犠牲のあるところどこにおいても命への支持によって表わされる。命の支持と関わりのない宗教儀式は人々とは疎遠になる。聖体拝領は、命のための奮闘努力に力を注ぐ共同体から離れては祝うことができない。そのような共同体から離れたら何の意味もなくなる。

以上が、不可欠な人間の善を作り上げることになる価値基準の概略である。ここまで長い説明が必要だったので、当初の目的を繰り返してみよう。解明したかったのは、歴史の中の神に向かうということは何を意味するのかである。神が歴史の中でなされることについて聖書記述を考察し、善をもって悪を克服する神の戦略に行き着いた。「善いことをする」の意味に深く入ることで、不可欠な人間の善の説明モデルの探求に導かれた。そこで歴史における救いのダイナミクスはこの探求によって光が充てられていることを強調して、説明を始めた。救いは全体性、完全性に関わる。全体性とは、われわれの生において、神の手から与えられる生の真実を実現することである。生のどのレベルでも侵害されることは、生の真実がその完全性において侵害されることを意味する。教会が貧困層を選ぶことの決定的基礎はわれわれの考察が備えたと思う。教会は犠牲者との連帯にしか立つところはない。こうして教会はしもべの道をたどる。そしてわれわれのモデルはどのような創造性をもって犠牲者の惨状に応えるかを、さらに示していくものである。

脚注

1. 汚名を被った人物。彼以降の人間と異なり、決して悪を善と呼ばなかった。君主には悪を善とする方が好都合かもしれないと助言した時にさえも彼自身はしなかった。
2. スチュワート・A・シュレーゲル『ティルライ族の自給自足』（ケソン・シティ、アテネオ・デ・マニラ大学出版局1979年）166－167ページ参照。
3. 『地球の世話をすること』（ケソン・シティ、クレアシャン・パブリケーションズ／ロンドン、ジェフリー・チャップマン、1986年）
4. 「権力は科学技術の時代に中心的な問題である…。熟達への情熱が導いたのは科学の前進、遠方の土地探査、世界中の民族の征服と奴隷化、大量生産と商品流通の技術開発である。熟達への奮闘は強者を弱者に対抗させ、貧富格差をもたらし、中央権力とそれに依存する衛星地域との対立を生んだ。そこで分配の公正は科学技術化された世界にとって解決困難な問題となった。」ギブソン・ウィンター『被造物を解放する』（ニューヨーク、クロスロード、1981年）

第3章

教会であることの意味

文化の中心性

われわれの説明モデルから得られる最重要な解明は、人間の不可欠な善を促進する上で文化的プロセスに与えられる主要な立脚点についてである。同様の結論に導く教会の社会的教説の展開の中で持続する動きに注目したい。

パウロ6世と社会的教説の展開

第二バチカン公会議が最後に発した公文書である「現代世界憲章 (Gaudium et Spes)」は、文化人類学者や民俗学者の成果をその文化の項に組み入れている。文化の定義は提供していないが、一連の補足記述で文化の古典的理解と現代の経験的理解に触れている(注1)。しかしこの公会議の教えは植民地支配による意図的な文化破壊の歴史の数々については楽観的といえるほど何も述べていない。

パウロ6世は回勅『ポプロールム・プログレシオ』[「諸民族の進展」1967年]を書いて「社会的問題は世界中に広がっている」と認め、構造変化の必要性を述べている。しかし文化的分析のうちに統合させる社会的役割を見ていなかった。彼の後の使徒的書簡『オクトジェシマ・アドヴェニエンス』[『レールム・ノヴァールム』公布80周年、1971年]は、メデリン[コロンビア]にいるラテンアメリカの司教団文書への回答として読むのでなければ、意味は不明確である。司教たちの具体的分析と彼らの状況で識別された信仰の要求に直面した教皇の回答は普遍的解決策を否定するものだった。そこで現地の教会はその地での真の証しを見つけ出す課題を委ねられた。

同じ書簡で教皇は重点を経済から政治へシフトし、経済問題における権力の絡む側面を強調する。しかし政治は広範な文化的宗教的土台の中に置き、そこから生とその意味についての深い問題が適切に扱われると述べている(注2)。そして科学技術的資本主義や官僚主義的社会主義のイデオロギーを超えて社会問題を独創的に考えるために、ユートピア的想像力が必要であると強調して書簡を締め括る(注3)。

そして1971年に現れるのは[シノドス(世界代表司教会議)による]『世界の正義』で、カルケドン公会議[451年]がキリスト論[キリストは人性と神性の二つの本性を唯一の位格の中に有するとした]に向かったように、この文書は正義と平和のための働きに向けられた。その六番目の段落は、社会正義のあらゆる形のために働くことは「福音宣教を構成する側面のひとつ」とみなされることを述べ、そのような働きが宣教や典礼祭儀と並んで教会の使命の必要な側面であるとしている。その働きは教会使命の正しい理解に本質的であるとみなされる。最後にパウロ6世は1975年『エバンジェリイ・ヌンチアンデイ』(現代世界の福音宣教)によって、『オクトジェシマ・アドヴェニエンス』に見

られた、政治から文化への暫定的な転換が決定的になった。1974年のシノドスは、多様な文化の人々の中での福音のインカルチュレーションについて述べている。教皇パウロは福音宣教を唯一絶対の神支配に結び付け、証人となることと宣教することは同等の卓越性があるとする。自由解放の概念を自らの社会的神学に統合している。その必要性は、文化の福音宣教と多様な諸文化のためで、文化のまさにルーツにおいて達成されなければならない（注4）。教皇パウロにとって明らかになったのは、構造変化が必要であり、創造的な文化変容なしには構造変化は不可能であるということだった。

ヨハネ・パウロ2世の社会的教説にすでに膨大なものがある。「信仰と文化」のテーマが中心で、そのテーマはインカルチュレーションに対する付随的関心を起こしていることを強調すれば本書の目的としては十分である。

こうした展開は人間の不可欠な善をより適切に把握しようとする探求を反映しているのではないかと私には考えざるをえない。この展開はそれ自体のやり方で、われわれの説明モデルで語ったものと同じ結論に達している。それは文化的なことの中心性である。

文化的プロセスと人間の生存

この数世紀われわれの受け入れた経済的価値の真実は、われわれを二つの恐ろしい事実と直面させる。世界人口の大部分に拡大する窮乏化と、迫りくる生態系の破滅である。この二つは関連している。一部の人間の欲求を満たすようにつくられた経済システムは多数のニーズを満たせないことがわかっている。このシステムが持続不可能であるところに、無意味で歪んでいるのが明らかである。ではそれを変えたらどうか。この経済システムによる生産物への依存度が高いので、その「商品」が（不可能だが）すべての人に行き渡るようにすることが自分たちの任務と革命理論家たちは考えがちになる。いわゆる先進国が人間的に望ましいとする現在の大量消費の方向ほど非人間的でばかげたことはないと思われ抜く必要がある。この方向がわれわれの地球上で生きることとは明らかに矛盾することを考察するなら見抜けるはずである。それはまたわれわれ人間が仲間としてともに生きることとも両立しない。大多数の人間を犠牲にするのでなければその方向を取っていくことができないからだ。

構造レベルで必要な変化のレベルは、真に革命的といえるほどの文化的創造性——これなしには変化は不可能——を要求する。なにか大きいことをおっかなびつくり奉るようなことは拒否しなければならない。スモール・イズ・ビューティフル [小さいことは美しい] とは、つまり地球のダイナミクスを完璧に取り入れた尺度だけが称賛に値するということである。地球を損なうことは愚行で、それは明らかにしなければならない。最大化を図り所有物を貯め込むことを崇拝するという現在の文化の病は、人の死や生命システムが死ぬことで深刻さに気付く。われわれはこの点を理解し、見識をもって生活しなければならない。文化的創造性が必要とされる構造変化の必須条件なら、その条件の促進はどの真に革

命的運動でも優先させねばならない。

人々が自分の運命を有効に支配できないなら政治権力の奪取は何の役にも立たない。誰もそうした人々のために声を上げることはない。自分で声を上げるのでなければ誰もしない。文化的プロセスへの参与によってのみ人々は自分を表現する。人々がなしには生きられない意味と価値が、このプロセスに参加することで批判、検証にさらされ修正、改良されることになる。

貧困層に対する優先的選択の妥当性

ディポログ、オザミス、パガディアン、イリガン、マラウィ教区 (D.O.P.I.M.) 展望書の最初の文言は、貧困層のための優先的選択を真の司牧活動の鍵としている。この文言にはまだ多くの誤解が付随しているため、上記説明が貧困層選択を正当なものとするやり方を示そうとする場合、あらかじめいくつかの点を明らかにするのがよいかもしれない。

おこりうる誤解のひとつに「選択」という言葉を、一部の人たちを優先し他を排除するという意味で、人々の中で選ぶことを要求していると捉える場合がある。これではこのメッセージが向けられる人々、メッセージの受け手を、文言の意図する焦点である内容について混乱させる。貧困層の優先的選択とは、あらゆる人に宣教するのはどんな福音かということだ。貧困層だけに語りかけるのではない。宣教すべきはただひとつの福音ということだ。そしてこの福音は貧困層にとっては良い知らせで、金持ちであることにアイデンティティを見出そうとする者には悪い知らせである。構造的悪の世界で神は偏愛する。神は貧困層の味方であり、これを誰にでも明白にできないなら、われわれは歴史の神の真実を裏切ったことになる。

また別の外的解釈として貧困層の美化がある。この傾向は神の偏愛の立場を正当化するためにあらゆる資質が貧困層に属するとしてしまう。金持ちと比べれば、どうやら徳があり「素朴」で、不道徳ややましいところはないと描写される。だが神の立場の唯一の根拠は抑圧の事実にあって、被抑圧者の道徳心ではない。抑圧は命を殺すことで、命の神は生きることに奮闘する抑圧の犠牲者の側に立つにちがいない。道徳的批判はあるが、貧富はともあれ個人に対するものではない。批判は二つの対立する大義の道徳性に向けられる。富裕層と権力者の大義と貧困層の大義である。批判は向けられ、決断されねばならない。二つの対立する歴史的大義のうちどちらが支持されるべきか。ほかのすべてはわれわれの回答にかかってくる。

さらにもうひとつの誤解は生活様式に焦点がある。貧困層の選択は、貧困層とともに貧困層のように生活することと解釈される。貧困層の歴史的大義について立場を明らかにし、一貫してその立場で生きることが、われわれの生活様式に避けられない深い結果をもたらすだろう。しかしその結果と優先的選択の意味が混同される時、その焦点はまたもや失われるし、真正の生き方にはつながらない。生の真実に忠実であることは、貧困層の歴史的大義との真正な連帯の基礎となる。生活様式の問題は、奮闘する貧困層と離れず、彼らの

大義を支え続けることで対処できる。

優先的選択について起こり得る誤解を片付ける中で、この選択の本質的な意味を伝えることができたと思う。先に私が主張したように、人間の善の説明モデルは教会に対して貧困層の優先的選択を決定的に根付かせるのに役立っている。価値基準のどのレベルでも犠牲者が生じることは、どれほど他のすべてのレベルの真正さを損なうか、このモデルによって理解できる。九つの各レベルの相互関係を全体的にみれば、犠牲者との連帯だけが命を促進可能にすることがわかる。ほかに考えられる方法はない。われわれの説明モデルで理解すると、教会が自らのものとして受け入れた立場からは、恣意性のあらゆる跡が取り除かれる。

しかし、ひとつ根本的観察がなされなければならない。貧困層の選択という言葉によって、この選択をするわれわれが必然的に焦点に置かれる。われわれ自身がその行為をする主体になる。聖書が関心をもつのは、人々が解放のために自ら選択することである。そこに示されるのは、教会としてのわれわれの存在における、一種の疎外感である。神にとっての関心事——貧困層が自らの大義のために選択すること——よりも、むしろ貧困層の選択について話しているわれわれに気付くという疎外感である。焦点を修正変更するなら、教会が貧困層を選ぶことの意味は次のように見えてくる。自らの生活、歴史、信仰に責任をもつ人々の出現を促進する教会であること、である。それは人間にとって自由、成長、真正であることを本当に可能にする場としての教会である。権威主義的な教会や支配的教会ではこれは達成できない。

貧困層の選択の意味に関するこの最後の修正的な考察は、われわれの説明モデルが解明を助ける D.O.P.I.M. 展望書の別の文言について考慮するよう導いている。そこには「基本的教会共同体を築くことによって」とある。

文化的価値と基本的教会共同体

教会の任務は、歴史における癒しと創造を促進することである。人間の完全な善の価値基準は、この任務において文化的価値が中心的位置にあるのをわれわれにわからせる。だから教会のダイナミクスにおいて、そのダイナミクスによって、真正な文化的価値の実現を促進する教会だけが、歴史の中で救いのかたちを具体的なものにする。説明モデルの観点から、基本的教会共同体にもとづいた教会は、教会であることを可能にする道のひとつというだけではない。それこそ教会であるための唯一の真正な道である。この論点を次の基本的共同体についてのまとめの考察で展開しよう。

完全不可欠な靈性

18世紀から19世紀の過激な無神論的革命運動はかなりの程度、疎外傾向があるとみなされた宗教性に対する反動によって熱狂的になった。価値基準からみると、不満の根拠をより正確に挙げるのが可能になる。その古典的伝統のすべてと一緒に、教会は常に宗

教的、個人的、文化的価値の重要性を強調していた。革命思想家は構造による決定とその生に不可欠な価値への影響を洞察する中で、すべての人間の問題をこのレベルで捉える傾向があった。教会は宗教的、個人的、文化的価値が社会的価値にどう関連するか明確に語れなかったので、宗教的、個人的、文化的価値の優位を繰り返すことで教会が生活や歴史上の本当の問題を避けているとみなされ、それゆえ——おそらく知らないうちに——世の中の悪と手を組んでいるとみなされた。宗教は抑圧された者たちのため息で、抑圧に対する表現は与えたが、抑圧に対する挑戦にはならなかった。革命思想家たちの反応は、宗教的価値を疎外するものとして分類し、個人的・文化的価値を見逃し、歴史の悪の解決策実行のために経済的・政治的価値レベルを通してのみ力強く格闘することだった。そのような反応では、本来解放して役に立とうとしていた人々に対する暴力的な結果を避けることができない。

宗教的価値が理解され、他のあらゆる価値レベルとの関係のうちに生きられるとされる時が来るまで、キリスト教はこの世で耳を傾ける価値がないとされるだろう。この達成なしには、われわれに残されるのは現在のところ「霊性」という言葉をほぼ反射的に連想させる二元性である。その二元性は、トーマス・ベリー [1914-2009、歴史家・生態神学者、御受難会司祭] にわれわれに本当に必要なのは「地球の霊性 (earthuality)」だと言わせた。命の恵みはたったひとつで、それはその不可欠な完全性において味わわなければならない。命の神は、死を作り出すシステムの世界では礼拝することができない。もしわれわれが貧困層に死をもたらしているプロセスそのものにはまって逃れられないなら、われわれはその病を運んでいるのだし、誰も自由にすることはできない。この世では、生ける神の礼拝は、生と愛を不可能にしてしまうあらゆるものに対抗する創造的闘争において明白である。完全不可欠な霊性はそれ自体、文化的創造性の中に出現する。文化的創造性とはシステムに支配される価値に代わるものを起動させる能力である。

神の立つところに立つ

急速に消えゆく限られた地球資源（それを尊重することを学ばなかったが）の支配を保持しようと企てて互いを核攻撃せざるをえなくなるような、恐ろしい死に方をわれわれがしないためには、神がこの世界で立たれるところにわれわれも立つよう学ばなければならない。われわれの時代の霊性の問題は、この世界で神がどこに立っておられるかを特定することである。歴史の中の神秘に向かい合う必要があるのだ。人間の完全不可欠な善からいって、神は命が犠牲になっているところにはどこでも立っておられると主張することは可能だ。十字架につけられたイエスを見れば、まづもって神が歴史の中で十字架につけられたすべてのものと同一であることを否定するのは不可能だ。十字架上の磔刑は現在も進行中の物語である。済んだことではない。それゆえ、イエスがそうであったように生ける神につながっているためには、犠牲となっている者たちを探し出し、彼らの大義を自らのものとし、生きるための闘争の中にいる彼らを支えることである。

問題は、われわれの精神と価値観、つまり何が望ましいかという感覚を形作るのは富裕層の歴史的事業なのかどうか。それともわれわれが誠実であるべきなのは貧困層の歴史事業に対してなのか。それは抑圧され十字架につけられた命のための格闘である。またしても、これは肯定的なものより否定的なものに集中するという問題ではない。むしろ肯定的なふりをするものの中に死を見出すこと、命を助けるものをはっきり見分けられるようにしてくれる、生への真の愛から行動することである。イエスの姿は悲しみの姿ではない。もしイエスが生の喜ばしい自由を具現していなかったのなら、誰もイエスに心を奪われず、誰も安心して世間体の良い生き方を捨ててあえてイエスに従ったりしなかっただろう。イエスの自由は人々のうちにこだまし、これこそ彼らが最も心の底から欲したものであると語りかける響きだった。信仰なしに奮闘する人々と信仰ゆえにそうする人々の違いは、後者には創造的な喜びがあることである。信仰ゆえに奮闘する人々は、彼らの戦う相手である悪、否定的なことの論理に支配されない。自分たちが助けようともがいている命の美、命に価値があるという意識で動かされている。大量消費的価値の奴隷になっている限り、生き方を変える必要があるという忠告は悪い知らせにしかならない。人間はあきらめなければならぬとされるもの、とらわれているものに注意を向けがちだ。これでは創造性も喜びもありえない。ただ信仰による洞察だけが人間に解放をもたらす。それは心の最も深いレベルでわれわれが本当に欲するものと一致させてくれるからである。人間としてのわれわれ自身の完全性は、他者の悲惨や苦痛から顔をそむけずに他者を直視することができるように要求する。信仰の洞察力はそれを示してくれる。私の中のいのちが、人間性を奪うような方法や支配的権力のやり方で他者と関わらないよう要求する。自分自身の精神に耳を傾けるなら、われわれの幸せと充足はどこにあるかを知るだろう。

喜びの中心は、いのちが動いていく方向の一部に自分もいるのを知ることである。喜びとは、忘却や薬物等による高揚した「ハイ」の状態によって獲得するものではない。そのような逃げの態度はやがてうつ状態に結び付くだけだ。[イエスの] 弟子であることの喜びは、自分がいのちの動きと一致しているのを知ること、つまり自分が癒しと完全性に向かっているのがわかるところにある。

福音は、誰もわれわれからこの喜びを取り上げることができないことを約束する。それゆえその喜びは、この世での他者からの応答によって変わるものではない。人々がわれわれに十分に応えなくても、自由といのち、そして完全性に向かっているのがわかるという喜びを妨げることはできない。

使徒言行録にはそのような喜びによって変容する人々の印象的な姿がある。イエスの死と復活以前には、弟子たちはおびえていて、所属集団本位の人々として描かれる。周りの社会が彼らの生き方をどう思うか、他人の目に支配される人々である。十字架にかかったイエスの愛によって解放され、弟子たちは喜びをもって一心不乱にいのちの真理を追求するようになり、他人からのしばしば耐えがたい反応にも影響されない。ここで得られる教訓は、もし真に生きる喜びを経験したいのなら、いのちの完全性をひたすら大事にしなけ

ればならないということである。

いのちをその完全性において大事にすることは本当の喜びの経験である。いのちを与える神の善、その賜物の善、そしてわれわれ自身の善は、この完全な賜物において、賜物とおして知ることができる。このいのちの完全性を求める苦闘の中にあっても、われわれを力づけるのはいのちそのものであり、神の力が人々を世界のいのちの自由のために駆り立てるのを経験するのである。キリスト教の中心となるわれわれのいのちの意味を祝う象徴は聖体祭儀である。ヨハネ共同体では、この象徴の好まれる定式語句は「世のいのちのための私のからだ」であった。完全性においていのちに仕えることを離れては、平和も喜びも知ることができない。

結びの要約

私の関心はわれわれの地元教会が全力を傾けてきた固有の自己実現のために、重要な基礎を準備することだった。信仰が社会の現実とどう関わるか明確に論述するなら、われわれが D.O.P.I.M. 教区で選んだ道筋が正当化されるのである。歴史の中の救いのかたちは、世の罪を克服するところにある。人間の完全不可欠な善のモデルは、この罪の具体的なかたちを特定できる。教会は歴史の悪を克服することで救いを促進する。人々をますます貧しくさせるものとしての悪を分析し、その元をたどって文化的プロセスの攪乱を検証したが、人々が自らの運命を創造的に形成することが構造的に否定された状態である。教会という共同体のあり方は、この歴史の悪に向かうのと逆のプロセスを具現化しなければならないのである。

犠牲者の側に立つことは最初的手段で、永続する手段である。しかし教会が貧しい者たちとの連帯を生き抜く唯一の道は、基本的な教会共同体によってなのである。われわれは教会法に定められた小教区と呼ばれる仕組みを過去から受け継いでいる。現代の状況では教区という容認された地理的仕組みを通して貧しい者が福音を真に自らのものとする見込みはない。福音が属していたのは、人間共同体の文化的活力がこの世の限界ある仕組みをなんとかうまく動かす世界だった。現在では、人々の生き方を左右する共同体の力の再活性化こそが、福音の解放のメッセージを貧困にある大多数の者たちに聞こえるようにする唯一のプロセスである。

私の考えるにこうした場にこそ、キリスト者のリーダーである司祭の霊性に対するこの上ない挑戦が出現するのではないか。つまり他者が生きることができるよう自らを放棄するというケノーシス (kenosis、神性放棄、フィリピ2章5節) の挑戦である。教会という存在の基本的共同体モデルに専心すれば、中心にいる司祭が奉仕して、信徒たちがそれを支持するという司牧モデルを放棄することになる。そのような司牧モデルを捨てることはわれわれにとってたいへん犠牲が大きい。人々が福音を自らのものとするのを可能にするのがわれわれの目標なら、その状態をもたらす原動力の中では司祭は中心的役割をもち得ない。自分たちの生との関係で福音をとらえる人々の集団を助けることで、中央に向

かう原動力に対して司祭は自らを周縁部にいるものとする。司祭の助けがなければその集団は初期の段階で確実に死んでしまうので、司祭は不可欠である。だが教区が秘跡行為を中心に展開したようには、こうした共同体は展開しない。したがって人々から必要とされる司祭であるためには、秘跡によりかかる司祭のアイデンティティをあきらめる必要がある。

秘跡を重視することが共同体のいのちを促進するのではない。共同体の福音として神の**ことば**をもつことである。貧しい者たちの側にいる神の力によって、自分たちの生と世界を名づけ、理解し、支配できるようにするための良い知らせとして神の**ことば**をもつのである。教会は共同体のこの変容させる力を通して救いを推進する。人々が福音をもつようになることが重要なことから、私は司祭である意味についてのもうひとつのイメージ——福音の意味を人々に伝える者——を手放さなければならない。われわれの状況で真に福音に仕えることは、福音の観点から人々が人生を振り返り、いのちを与える真理を自分で見つけられる場所を開くことである。共同体の僕しもべとしての司祭は、伝統や現代の知識からなるべく多くの事実や情報を人々に提供できるようにする。人々が自らの生を考える助けとなるためである。

信仰の原動力は、現在の状況での福音の反映とするのは誤りである。むしろ福音の視点からいのちについて考察することである。それはまさにわれわれの生きているいのちそのものの解釈学としての福音である。それによって、人のいのちの真の意義が、抑圧する悪の観点と、いのちの神（生きるための苦闘にある人々とともにある神である）の真実の観点の双方で明らかにされる。

こうした教会であることに専心するのが、D.O.P.I.M.推進の意味である。危険がないわけではない。現在の政治権力構造から利益を受ける人々は、共同体の力が現れるところすべてが自分の位置と現在の支配にとって危険とみなすし、彼らが基本的教会共同体は政治に大いに関連すると考えるのは誤りではない。誤りは、これが教会の政治問題化を意味すると考えることである。こうした人々が目の当りにしながら把握できず、歓迎さえできないのは（神の解放の**ことば**を自分のものにして生じる）文化的価値の実現である。共同体のこの自立的・自律的な力は、人々に自分の運命を決める能力があるとは信じない、支配を主張する右翼左翼のすべての人間に不快に思われる。現在の状況で本当になすべき必要あることをするなら、どちらの党派も喜ぶようなことはない。そこでわれわれのいのちとまでいかなくても評判は危うくなるかもしれない。常に犠牲者の側にある神の展望にわれわれが懸命に心を傾けていくなら、これまでわれわれとは「気が合う」とみなしていた面々もそう考えなくなるだろう。しかしそんな評判のランク付けも、もっと大切な問題の脇に置けば意味をもたなくなる。それはわれわれの生のもつ歴史的な意味を知るという問題である。他者の生に働きかけ、自らのうちにあるいのちの真実に応え、われわれの時代でいのちを与える者、神に応えてゆくことを知るという歴史的な意味がわれわれの生にはある。

司祭独身制についての追記（注5）

質問：あなたの言う教会であることの意味は、実際には司祭の独身制と矛盾しているように思える。「自由が最大限に育まれる場」である代わりに、人々の自由に制限が加えられる場所のようだ。

回答：この質問はいくつか異なった問題を含んでいる。ひとつひとつ対処するのが最善だが、まず独身制そのものの価値について話すことから始める。これは困難であると同時に必要なことである。この主題に関してすぐれた神学的考察が不足しているからである。いままで書かれたことの多くは、目的と効果の混同によって損なわれている。[教会の]権威ある側の扱いでも、結婚しないから他のことができる点に注意を向かせて独身の選択を正当化しようとする。そのため独身制の実際的な点を扱うことになる。独身制は「他者のために手を空けている」「もっと祈る」のを可能にする価値とされる。こうした議論ではうまくいかない。言及される資質や任務が、独身ではない人では同じように実現、達成されていないと証明するのは不可能だ。独身制の価値を実際面で正当化しようとするのは不可能で致命的なことだ。致命的というのは実際面の正当化を試みるなら、この賜物の最奥の意味を裏切ることになるからだ。

独身制の最奥の意味は、実際面の思考上は容認できないことになる。独身制の真実は次のことにある。ある人たちは、当然わずかな数だが、神がおられる不思議さ——無限の寛容、どこまでも受け入れ、是認されること、赦しと自由——に大きく影響されるので、文字どおりそれ以上何も必要なくなるということだ。言いかえれば、ほとんどの人々の生活においてよくある不安感と情緒的ニーズのパターンが、司祭の生活では優勢になることがない。もちろんほかにも多くの人々が神の愛について知っているが、知っていても同じように影響しない。だから何も必要なくなるような影響を受けるといふごくわずかな人たちの賜物について語るのだ。真正な独身制はまれだがすばらしいものだ。司祭か修道者が大量消費して高額品だらけの生活で身の周りに防犯体制を築くのを見た人が、埋め合わせが必要だから無理もないと言うことがある。その同情からの判断は的外れだ。そういう人に対しては、単に独身だからなのではない、という判断をすべきだ。真の意味で独身なら埋め合わせる必要もないはずだから。正真正銘の独身者は神の世界で生きることにたいへん幸福を感じるので、深いところで彼らのニーズはすでに満たされている。そのような人たちは歴史の中の神秘の際立った証人で、彼らが証するのはあらゆる人が一致する必要がある真実——彼らにとって神の真理が驚異であること——である。もし世の中に正真正銘の独身者がいるなら、全世界は極めて豊かにされる。すべての人が自分の最奥のニーズを満たしてほしいからである。

結婚生活や友人関係で人々は支え合い、互いの価値を認め合う。これは普通のことである。しかし誰も自分の存在は他者の終りない欲望を充足するためにあるのではなく、人が他人に自分の欲求充足の対象になることを要求すれば互いの関係は悪化する。

人は限らない欲求という真実がある中で、互いを支え合うようになっている。そしてそのことが真の関係性を造る。宇宙とその中心にある神秘だけが人の真の要求を満たす。人々は互いのために神秘の真理の秘跡となりうる。これは結婚でも起こるし、真に独身である人を直接知ることによっても起こる。

正真正銘の独身制はこの神秘の証なのだとは私は主張する。そしてこの神秘と関係のあるあらゆることと同様に、ただ自由に喜びをもって受け入れ生き抜いていくものである。それ以外ではすべて矛盾するものとなり、何の証にもならない。だがそのように生き抜くところでは、共同体の生にとって意義深いことだ。不安感から生じる所有欲によって情緒的關係がひどくゆがめられる世界にあって、われわれは皆、無条件の肯定の源を経験する必要がある。真の独身者はその源と一致している。そのような独身者は男性であれ女性であれ、あらゆる人にとってのいのちの真理を体現化している。つまり人としてのわれわれの真理と尊厳を限りなく肯定している。脅迫的な必要を感じることから解放され、人は互いに理解することで自由に関わり合い、生き方は関係するものすべてにとってはるかに健全なものとなる。

ここまで独身制の肯定的価値を述べてきたが、最初の質問の他の側面についても快く取り上げたいと思う。現在、そしてこれまで何世紀にも渡ってカトリック教会にはこの独身の規律または掟が存在し、このため独身でいるというカリスマ性を有すると思われる者だけが司祭の叙階を受ける。これは現在の状況を適切に述べている。たとえば、カトリック教会は司祭が独身であることを要求するという言い方で説明しようとするなら、それはセンセーショナルな不当行為の状況を引き起こす。どの制度もどの国もどの教会もかつて人々に条件として独身を強制する権利を有したことはなかった。そのようなことは全く容認しがたい人権の侵害となる。現在の教会法の要求では、独身でいるというカリスマ性が自分にはあると識別する者だけが、自らを叙階のため献げるべきであるとする。

そこでそのような法が望ましいかどうかの議論が起こるかもしれない。司祭の任務分野を不必要に制限していると言われるかもしれない。だが独身のカリスマに恵まれているかどうか識別するよう求められ、肯定の答えをした者たちにとって、この議論は意味がない。制限があることについての議論は、キリスト者共同体のニーズに目が向いている。現在叙階されている司祭の権利には向いていない。キリスト者共同体ニーズに目を向ける議論としては、抗いがたいものになっている。聖体で養われる権利を有するが、その権利がこの制限的規律によって否定されるキリスト者共同体の数はずねに増加している。教会がこの状況を正さない限り、司牧面で不作為の重大な罪を犯すことになる。これが教会法の変更への圧力の主な源である。現在の法の下で叙階された者に対する不当行為の問題なのではまったくない。

むしろ適正な構造形成があれば、独身制は司祭への独特の召出しと見なされ、人々に真の独身のカリスマがあるかどうか識別するのを助けたらう。このように人々が自らを識別するよう奨励されないところで、しかも人々が、問題は自分自身の真実であって、司祭

になるために充足すべき外部的条件ではないことを理解できない場合、本当に不当行為がなされてしまうこともありうる。私と関わりのなかった状況下にあっては、どれほど適切に構造形成がされたかを私は知るところではない。

だが司祭になるために独身でなければならないと教会は言っているのではない。それを正当に要求することは決してできないだろう。現在の教会が求めているのは、独身であるという恵みをもつ者だけが自らを司祭職に献げるということである。司牧の面から教会がこの法を持ち続けることが正しいかどうかは、今後ますます論議される。

脚注

- 1 1. 第53-62項。
- 1 2. 「[政治的活動は] 文化的・宗教的集団が人間と社会の本質、根源と目的についての最終的な確信を、受入れ自由とすることにおいて、社会の中にあって公平にそれぞれのやり方で発展させる。」第25項
- 1 3. 『オクトジェシマ・アドヴェニエンス』第37項
- 1 4. 使徒的勧告『福音宣教』第20項
- 1 5. 多くの重要な主題が質疑応答時間に挙げられた。そのうちいくつかはこの発表に組み込もうとしたが、組み込めなかったものもある。そのひとつに独身制の議論があった。ある大事な分野、救いと解放についても割愛することにした。最近のクレアシャンによる出版物で、このテーマについてボフ兄弟 [Leonardo Boff と Clodovis Boff] による卓越した文章があるからだ。私よりうまく扱っている。

付録

第一部

悪の不思議に対する神の解決策

聖書を読むことは、支配的な力の幻想ないし帝国主義の力について学ぶ痛みを伴うプロセスであると強く主張できるかもしれない。もっと積極的に言えば、この歴史の中の悪の力を克服できる手段を絶望的な世に伝達するものとして聖書に書かれた伝承を読むことは有意義である。

今のこの時代、核の威力が人間ドラマを突然終了させる可能性（蓋然性かもしれない）に直面しながら、われわれはそのような帝国の幻想に溺れた不可避の結末を知らされているのだ。過去の世代には決してなかった方法でわれわれに明らかにされたのは、支配の真の姿と、死としての犠牲者の創出である。犠牲者にとっての死だけでなく、関わるすべての者に対する死である。

人間ドラマは、勝者対敗者、勝利者対犠牲者、奴隷主対奴隷、帝国対植民地、超大国対弱小低開発国となるような役柄が乱雑に入り乱れて継続していく。核兵器競争の壮大な皮肉は、ヒーローたる勝利者と打ちひしがれた犠牲者というシナリオを終わらせる可能性があることだ。物理的な支配力はその頂点に達していく…奴隷主対奴隷、勝利者対犠牲者の弁証法は、あらゆる人間がすべて犠牲者になることで終焉を迎える。(注1)

しかし私はそんな教訓からは何も学べないと思う。自分がただちに犠牲者になるかもしれないという恐怖は、現在の危機に対する創造的答えを助けることはありえない。恐れは創造性を生み出さない。少なくとも死ではなくいのちを促進するような種類の創造性は生まれない。われわれがこの伝統から学ばなければならないのは、いのちを創造的に愛する可能性である。いのちへの創造的な愛は、悪が定める以外の条件で、悪を克服できる。この可能性こそユダヤ・キリスト教の啓示を構成するのである。

旧約の啓示の頂点

帝国主義を超える存在のかたち：僕^{しもべ}の展望

イスラエルの経験の始まりではどんな約束だったにせよ、支配力の観点から自分たち自身を理解したいという誘惑が早期に、決定的に起こったことは明らかなようだ。ダビデ王朝下の事態はひどく、それ以降も悪化は次第に進んだ。ごく簡単に概要を述べる。

預言者が偶像礼拝と解釈した権力闘争を通して、まず北王国が滅亡し、次に南王国が消え去った。イザヤは南王国崩壊を目前にして、何が偶像礼拝に関わっていたか非常に明確に表現している。私が他所でも書いたことであるが以下に記す。

当時の超大国はアッシリアで、強引なほど軍国主義的で現在のイラク北部が中心だった。ユダのような小さな都市国家はこの巨大国家に絶えずおびえていた。紀元前735年、シリアとイスラエルの弱小王国同士は一緒になってユダ王国を攻撃した。目的はユダを反アッシリア陣営に加入させるためだった。ユダの王アハズはただちにアッシリア王に援軍を求めた。援軍が来て、独立国としてのシリアとイスラエルは消し去られた。預言者イザヤはアッシリアとの連合に反対だったのでアハズと対立していた。しるしを与える神への信頼を促した（[イザヤ書] 7章14節）。しかし王アハズは取り合わずアッシリアとの同盟が続いた。

アハズの息子ヒゼキヤはこの同盟を脱したかったが、まもなくエジプトとの同盟に参加するよう勧められた。エジプト馬の戦車という当時の超強力兵器が見返りだった。ふたたびイザヤが進み出て権力政治への関与に対して警告を発した。ふたたびそれは無視された。ユダ王国はエジプトの戦略的同盟国となった。そこにアッシリア人たちが攻めてきた。センナケリブ王のもと、彼らは海岸沿いの平野をエジプトまで素早くやってき

たのでヒゼキヤはエルサレムで動けなくなった。イザヤはヒゼキヤに耐えるよう、恐怖に屈しないよう諭した。エルサレムはその後百年存続した。

政治同盟の問題対処でイザヤは常に宗教的なことばを用いた。宗教的問題と考えたからである。偶像礼拝、神への信頼、正義と正義の欠如について語った。彼にとって平和とは究極的に宗教的概念で、正義と安全もそうであった。こうした分野の最終的な答えは、神が造られたあらゆる人々とともに生きることに関わるので、人間という家族に対する神の望みについて何らかの洞察を伴う。

…武器と同盟に信頼を置くことは、イザヤにとって偶像を信頼することだった。偶像とは、国家が依存するところの力のイメージである。すべてはこの偶像のために犠牲になった。必要とあれば民族も犠牲に含まれる。あらゆる道徳的配慮も偶像に従属させられる。それには「国家の安全に関わる問題」を呼び起こすだけで十分である。イザヤにとってこれは「死と契約を結ぶ」（イザヤ書28章15節）ことだ。国家安全の絶対的原則は国を神の位置に据える。それによりあらゆる道徳的配慮はこの原則に仕えるため無効にされ、どんな程度の暴力も正当化される。どこにいても統治者階級は安全を軍備や銃器、軍隊、「力の均衡」と同等のものとする。彼らは自分たちの本当の脆弱性に関しては嘘を生きている。

…（イザヤにとって）国家の安全は、正義の働きにおいてしか知られない真の神を礼拝し、知ることにあった。エルサレムの男たちは間違ったことを恐れていた。いのちの神を畏れることや地上で正義を行うという神の要求の代わりに、彼らは軍隊の力や死に畏怖の念を抱いた。そして彼らは死と契約を結んだ。それゆえ国家は滅亡の運命にあると預言者イザヤは言った。…国家に安全をもたらすのは、正義に目を向け、共同体の弱者と貧者に関心を向けることだ。それが国家内部で進行中の破滅を停めるので、優先して行うことは国家に安全をもたらす。国家の安全は、国家が仕えるべき社会のうちに正義が機能しているということなのである（注2）。

それゆえ国家が用いる武力がどれほど多数であろうとも、共同体に安全がもたらされることはない。正義のない社会は文字通り——道徳的にだけでなく——防衛不可能で、決して安全にすることはできない。国家がいかなる武器を使おうともその不安感は慢性的である。国の弱点の本質は、まず不正と困窮、次にその結果としての戦争による荒廃のため国民が破滅するという点にある。不安定な状況の真の原因に対処できなければ、抑圧への道しか残されない。イザヤにとって偶像崇拜の宗教は軍国主義であり内部からの抑圧である（注3）。もしある国に安全上の問題があるなら、人々がすでに被ったこと、つまり彼らが国家の偶像にどのように犠牲として捧げられたかが第一の原因である。不正な国家の経済

的根底にある資源の割当てを誤ると、二重にその誤りが明らかになる。一方では軍国主義化、他方では栄養不良による死である。

こうしたすべてにおいて、イザヤはイスラエルの預言者の伝統に堂々と連なって、君主制の帝国主義的見せかけに対する積年の戦いの中にいる。神に忠実であることは、帝国の支配力に代わる生き方を生きを意味する。これに代わるのは、共同体の力、非支配的で創造的、いのちを与え、人間に不可欠の善を追求することから生まれ出る力である。この預言者的伝統の結末は「第二の出エジプト」と呼べるもので、イスラエルがイスラエル自身から脱出することである。それは他を支配する者としての自己理解を超越し、苦しむ僕しもべの特別な描写の中に自らの運命をみることである。

つまり、「存在のモーセ的飛躍」とエリック・フェーゲリン [ドイツ生まれのアメリカの政治哲学者 1901-1985] が呼ぶところによって、選ばれた民族は歴史上のかたちで出現していたのである。それは他民族の階層的・帝国主義的社会と対照的だった。現在、神の下に存在させられるものは、帝国崇拜をもたらした神=宇宙の秩序への律動的調和からはっきり区別された。神政による国家の制度、つまり神の下にある国家は、実際の存続のため王制によって補充された。そして神の下の社会生活の真のかたちは、人々の制度や道徳的姿勢という秩序から区別されることはなくなった。まず、緊張の謎を解明しようとして、イザヤは具体的な社会での歴史の時間を分け、改心していない現在と変容した未来とした。現在と未来のつながりは不明瞭なままである。

エレミヤを通して、この改心していない現在は実存的意味を獲得した。それは、この預言者が神の苦難に関与したことが、実在の社会を超えたイスラエル人の秩序の中心になったという点においてである。そして第二イザヤを通して、ついに実存的苦難から現在の贖罪の経験が、まさに今ここに出現した。「イスラエルのイスラエル自身からの脱出」とわれわれが呼ぶ動き、つまり実在社会の秩序から贖罪の秩序に向かう動きは、このように完成された（注4）。

フェーゲリンが急いで付け加えるのは、苦難の成果としての贖罪の見通しだけが、この時点で完成に至っているということだ。現実にはイエスの到来を待たねばならなかった。しかし彼の言及する実在社会の秩序から離れる動きは、エレミヤにとって何よりも増大する確信で、神の下の社会にある存在は——シナイ山の啓示の核心である——強力な帝国に囲まれたイスラエルの小さな神政国家の形態を取るものではないということだった。もちろんエレミヤはそこから離れて向かう先が何を意味するかわからなかった。彼は民の心に書かれた新しい契約について語った。

フェーゲリンは第二イザヤの中に実在の秩序そのものからの脱出の謎が象徴化されているのを見つけた。それは「苦しむ僕しもべ」の姿を取っている。この預言者は彼の前にいた預言者たちの上に築いて、律法の成就によらない救いを強調した。これによって彼は救いと苦難にもはや対抗しなくてよくなった。救いと苦難は代わりのものになることをやめた。イスラエルは赦されたのだ。関心は今や贖い主である神の下のいのちの秩序に焦点

を合わせる。僕はその秩序を具現化する。贖いは苦しみをもたらすものとして、まさに今ここで、啓示される。

——新しいイスラエルはヤハウエの僕で、神は救いを地の果てまでもたす者とする(イザヤ49章6節)。

——僕の任務はイスラエルから諸民族に贖いの知らせを広めることである。この任務は帝国の完全な解体という条件の下に遂行されるのではなく、むしろ帝国支配的野心に気づき、それが継続する条件の下に遂行される。

——その任務は、「そのような不吉な状況下でそれを請け負う者たちに愚弄、屈辱、迫害、そして苦難をもたらすことになる」(フェーゲリン 507)

——僕は「歴史の秩序では新しいタイプ、つまりイスラエルにおいてイスラエルのために預言者が創造したタイプで、この任務が遂行されるまで他から形体が与えられる」(507)

——不運や虐待にもかかわらず、僕は背を向けない。「神に信頼して彼は神に教えられたことを弟子のことばで語り続ける(512)」

ついに人々は他に代わって苦難するという信じがたい話を信じるようになる。そうなる時、帝国の秩序からの解放が完成されたことを知る。

「多くの死を苦しんで生きる僕、挙げられるために貶められる僕、多くの者が自分の子として救われるように彼らの罪を担う僕は、諸王を超える王で、帝国の秩序を超えた神の代理である。そして神の下にある民としてのイスラエルの歴史は無名の天才の展望のうちに完結する。それは代理の苦しむ者としてイスラエルが自分自身を超えて人類への救いの光になるからである。」(515)

教会は僕の使命を具現化しなければならない。われわれは自らの肩に悪の重荷を負って、悪を完全に逆転させるための犠牲を払わねばならない。どんな状況にあってもこれを創造的に行うことは、代わりの方法、つまり不可欠な価値の基準を想起することである。

なぜ神秘は、ユダヤ・キリスト教の貧しい者の神として理解されなければならないか、できるだけ簡潔なわかりやすい説明を試みたところである。いのちの神の代理で、それに対応する存在である僕は、不正と対決しなければならないし、正義が地上に確立されるまで決して妥協してはならない。もちろんそれこそが僕の苦しむ理由なのである。神のインシアチブはうちひしがれたこの世を愛する、無限に犠牲を払う抱擁である。この愛がもたすのは、偽りにあったすべてのものへの癒し、あらゆるレベルでのいのちの真理の促進、それに責任ある自由への人々の召出しである。歴史上の救いのかたちは、愛において行動するよう新たに力を与えられた人々のかたちで、それは物事の深いところの真理を踏まえている。

もしわれわれもまたいのちの神に向かう存在であるなら、事物の真理を知り、それに基づいて生きることの両方が義務として課されている。

第二部

人間の完全不可欠な善の価値基準

序文で示唆したように、現代の最も差し迫った問題は、規範的社会倫理の哲学的・神学的根拠を発見し明確に論述することである。それにより文化と社会的制度は、人間の善を促進する公的政策と各人のコミットメントを通して批判され修正されうる。

この差し迫った問題の認識を妨げているのは、不快感そのもの、今の時代の文化をわれわれがどう考えているかということになる。ここで言いたいのは、文化の意味が余暇にすることになっているという問題ではない。むしろ、文化という用語の述語的意味が社会科学分野でもつようになった含意を問題にしたい。というのも文化の領域が今では経験主義的、科学技術的で無規範状態と理解されるためである。それはあたかも、絶対主義的な西欧的精神の生き方を規範と確信しているので、現実を知るための代替りの方法に向き合うことが避けられなくなってめまいを経験するかのようである。そこでの不適切な反応は徹底した相対主義に向かう傾向がある。あらゆる倫理的選択は、恣意的な個人の好みとされてしまう。結果的に、道徳上の不一致が権力への意志に基づくイデオロギー闘争に墮してしまふ。あらゆる道徳性はその利益団体によってレッテルを貼られる。革命的党派はただ一つの行動戦略しかわからない。

もし教会の介入を単なる権力闘争のさらなる事例と見なすのでないなら、そしてもっと大事なことに、この世で利害対立する社会のそれぞれに未来があるなら、イデオロギーの正当化を超えて批判的根拠に達する必要がある。われわれは人間の超越性の真の要求について、誰にも理解できる、説得力ある説明をする必要がある。

創造的態度をもって不正と戦うには、破壊されつつある人間の善についての洞察力が必要である。そのような洞察力の存在は、致命的な暴力の存在がある場合に想定されがちである。だが心しておかなければならないのは、今日多くの人々が（種のレベルで触れるまでもなく）構造的暴力の複雑なシステムのゆえに死ぬということである。このシステムはわれわれ自身をも含む多くの人の共謀がなければ存在しなかった。ロナガン（注5）によると、多国籍企業は新しいものではなく、経済活動が過去何世紀も目標だったことをただグローバルに行っているのだという。多国籍企業は、われわれの経済・社会・文化、すなわちわれわれの精神を長い時間かけて徐々に形作った原理の上にまさに築かれている。この結果、われわれの中とこの世に存在する不正（それに対して反対の立場を取らなければならないのに）の源や範囲を正確に識別することが極端に困難なのである。正確に識別できないとしても、われわれの誠実な奮闘は、克服されるべき悪そのものによって弱体化されうる（注6）。そこでさらに必要なのは、根本的に人間の善についての批判的説明である。そのものの複雑性があっても、一般にわかりやすい、説得力ある説明が必要である。

価値の概念

次に来る避けられない準備は、価値の意味の解明である。われわれはこれを正確にする必要がある。第一に、私が理解しているのは、原子を構成する粒子同士の関係から人対人の関係にいたるまでの、探求・切望・上昇からなる出現の過程という性格をもつ宇宙全体の存在である。

第二に、人間の善の構造は、連動する循環の仕組みで構成する明瞭な秩序を通して、欲望の対象から価値と呼ばれるべきものへと、上昇する理解度のパターンで同様に特徴づけられる。日常会話では欲望の対象は価値として言及される傾向がある。しかしそれは正確でないことがある。われわれは価値に関して慎重に検討するからだ。「本当に価値があるだろうか」という自分に問いかけ、「本当に」の中身を探ることで価値の概念が生じる。善は欲望と関連付けられ、どんな善も一般に価値と見なされる。しかしまたもやこれは無責任な選択の可能性を放置してしまう。価値は、妥当な選択の対象としての秩序の善に限定して関連づけられる。そこで、やむをえずその選択をしたわれわれ自身が焦点に置かれる。われわれは選択をすることで自分自身をつくり、人生の実際の方向付けをする。選び取るべき最終的価値とともに、選択者に由来する価値があるのである。

秩序の善のレベルから価値のレベルへの動きは、知的・合理的意識から合理的自己意識——良心という人間意識の最も高いレベルにあたる——への心の中での動きとつながっている（注7）。人間の善を（i）欲望の対象、と（i i）秩序の善という二つのレベルで想像することから、（i i i）価値レベルで人間の善について判断するところまでの動きは、道徳的回心の問題と完全に結びついている。他者やこの世、そして自分自身をつくりあげることに対するそうした行為の結果に関して自身の全行為の責任を受け入れる者だけが、充足から価値へと選択基準を実際に覆すが、それが道徳的回心の兆しである（注8）。単にその動きを欲望の対象から秩序の善への動きとすることは、道徳的レベルにまだ達していないことになる。秩序の善が関わるのは、欲望の対象に影響する循環の仕組みの確認である。しかし人々は道徳的にならずに自分の欲望とニーズを満たす方法としての循環の仕組みを機敏に見つけ出すことができる（注9）。

道徳性は手段と目的の関係に関わるものでは決してない。手段と目的の関係は、意図するところをかなえるための合理的関係である。それ自体は道徳の前段階である。そのもとになる基準は効率性または有用性である。明白なのは、人々が他者の存在と世界に対して大損害と破壊をもたらす点ですこぶる効率的になりうることである。手段・目的関係を促進することは道徳性のレベルに何を意味するか。これを価値の源としての自己の地平に取り入れなくてはならない。すなわち、人間としての生の包括的な意味の問題、現実全体としての包括的な意味の問題に関連して用いなければならない。これはある善——誰かにとつての、何かの目的のための善——の関係する側面から、普遍的なコンテキストへと進む動きを伴う。どの部分を選ぶかに関わる全体との関係があり、われわれが自己の性質と宇宙の性質について必然的に立場を明確する価値判断をする上での関係がある。存在の宇宙に対するわれわれの姿勢を行動に表わし、限界ある選択をその地平のうちに持ち込もうとす

ることによってのみ、そうした選択は道徳的なものにできる。

明確にできると私は願うものだが、こうすることで、特定の善あるいは秩序の善を、価値の階層の秩序にある具体的な関係性と最終状態にある、他の善との関係に入らせるのである。価値の階層とは、生に不可欠、社会的、文化的、個人的、宗教的という各レベルである。

可能にするものとしての限界

準備の最後に考慮することがある。それは、創造性は限界を容認することから生じるという主張に結び付く。超越と限界の間の緊張をうまく維持することで創造性は生まれる。つまり真の創造性は弁証法的構造をもち、この構造は人々が人間に不可欠の善を深めようと躍起になるところにはどこでも見つかるのである。

1. いのちの動き

先にドーランの著作と、彼が精神分析理論の見逃しを是正する試みから自分の見解をどう展開させたか述べた。ドーランはある人の中に起きていることは、その周囲の共同体や文化との関係を理解することなしに理解不可能であると考えようになった。

1. 01 人の最も深い欲望は自分の生を意味あるものにする事で、この欲望はいのちの動きの中に見出すべき方向を発見し、着実にそれをたどる範囲で充足される。われわれの生の手掛かりは歴史の挑戦の中にある。それは主体となる (to become subject) ([パウロ・] フレイレ [ブラジルの教育思想家 1921-1997 『被抑圧者の教育学』]) 挑戦で、「着実に機会、または運命の領域を制限し、着実に意識的支配と周到な選択の領域を拡大すること」(注10)である。方向が発見できないことは、程度の差はあれ病になること、われわれ自身にもわれわれの宇宙にも適合しない意味の世界にゆだねられてしまうことである。

1. 02 [精神分析のような] 深層心理学から現代社会批判への移行の鍵となるのは、人間の精神が決してそれ自体を犠牲とする原因にはならないという認識である。「強迫観念はそれによる病気の発生原因ではない」(注11)。精神疾患はわれわれのうちのいのちの動きが歪むことから発生するが、この歪みはより広範な歴史的過程にわれわれが関与していることから発生する。不調を起こす強迫観念はたいていわれわれの共同体や文化にある歪みに関わらざるを得ないことの結果で、つねに人間の歴史の犠牲なのである。

——影響ある重要な他者について

——ある者の共同体における歪みから出現する社会状況について

——頓挫した文化的価値について

——自分自身の自由、自己破壊性について

1. 1 主体の弁証法

人間主体の統合性とは、身体と感受性ある精神からなるひとりの人間の限界の原則

と、われわれの霊的広がりの方学、超える能力である超越の原則との間の緊張を持続させるという問題である。限界と超越のこの緊張は、身体という有機体に属するパターンとわれわれの知的意識が無制限の目標へと向かう広がり属するパターンの間の不均衡に根ざしている。われわれの精神はこの両方のパターンをあわせもちその間の緊張を経験する。精神的な健康であるには、その緊張に留まり、統合する者としての自己が問題の出現によって働きかける者としての自己による変容に対して常に開かれていることだ。ドーランが言うように「それは繊細な折衝だ」(94)。この緊張が限界へと動くと、うつに向かう。超越へと動いたら、身体実在という根っこを失う統合失調症に向かう。われわれの夢想はそういう繊細な精神において、変化を描くことができる。

1. 1 1 ここていう弁証法とは、いのちの動きの弁証法で、その動きの中での方向の探求という規範的秩序を伴う。達成すべき目標は、主体としての個人の完全性である。

われわれにとって前進があるなら、想像力が必要だと多くの人は強調する。しかし想像力をどのように働かせるかについて理路整然とした説明はされていない。ドーランの提示するのは、内的必要を開示するという探求する自己の普遍的特性としての超越の概念である。その内的必要の理解度は自ら証明している。ドーランの提示は、感情・想像力・知性を超越する連関を同様に理解できる方法をとる。

想像力を自由に解放するのは主体の弁証法の統合性である。統合性は精神の虐待を癒すことを要求する。内なる犠牲者と外なる犠牲者に対して関心を向けることを求める。

1. 2 共同体の弁証法

このレベルでの限界の原則は、間主観的自発行為の原則である。超越の原則は、共通善に奉仕する、われわれのある程度自覚された知性の働きである。この弁証法を保持できないと、徒党・階級・民族の集団偏見が生まれる。達成されるべき目標は社会環境の完全統合性である。

1. 3 文化の弁証法

個人的価値レベルで主体の弁証法に類似し、社会的価値レベルで共同体の弁証法に類似するのは、特有な文化の弁証法である。文化の完全統合性はある社会的環境の価値観を決める。ここで必要なことは文化的プロセスの方学がただちに実践的・功利的になるのを防ぐことである。創造性ある統合状態はそれを批判し、生きる方向付けのための意味と価値を生み出すものである。しかし文化的プロセスが無視されるか実践だけのものとされるなら、創造性ある統合状態は機能できない。人々が受け身の消費者の地位に甘んじるしかなくなり、ジャーナリスト、作家、評論家はわれわれを現在の混乱に陥れた諸価値をおうむ返しに表現するだけになる。

2. 価値基準を十分に拡大すること

互いに連動する三通りの弁証法モデルが貴重であるのは疑いないが、このモデルは関係する価値の様々なレベルの観点で、中身の開示を要求する。特に異なる価値レベル間の関係は明白にする必要がある。モデルは、内的関係が暗に定義する範囲においてのみ説明できる。以下の図表が示すように、9つのレベルは互いに連関する。

2. 1 レベル1から4 生態学的価値

われわれの世界の理解に従って、物理学、化学、植物学、動物学の諸科学は発展してきた。こうしたすばらしい発展についての最も意義深い観察は、われわれが諸科学を自分たちだけの知識としてこなかったということにあるだろう。それはあたかも知識によって支配したいという情熱が、宇宙に対する恐れや宇宙に属することの反映であり、恐れるものから自分たちを遠ざける手段であるかのようだ。われわれが研究したうち最も明らかなメッセージは、われわれが理解し始めた各プロセスに自分が属する範囲である。つまりわれわれは実際自分自身を研究していたのだ。これが制止された。

人間の善の構造 9つのレベル

宗教的 (2. 1 9)	上から
個人的 (2. 1 8)	調節と実施可能性
／ 上部構造的	
文化的 (2. 1 7)	-----
＼ 基礎構造的	
／ 政治的	
社会的 (2. 1 6)	— 経済的
＼ 科学技術的	
生に不可欠の (2. 1 5)	
動物学的 (2. 1 4)	
植物学的 (2. 1 3)	下から
	差別化と創造性
化学的 (2. 1 2)	
物理的 (2. 1 1)	

レベル間の真の動きは	あるレベルでの真正さは
個人的関係を通してのみ生じる	次に高いレベルの真正さを 要求する

2. 1 1 われわれの間のいのちの持続性と、物理的・化学的レベルでの宇宙全体は——たとえば、われわれのうちには星の破片がある、つまり同一の物質リン [燐] である——神が次々に開く宇宙の 200 億年の歴史としての、われわれ自身の物語のもつ真の様相を探る大きな閃き基礎づける。しかし閃きの実現とは、出現する宇宙のあらゆる相互関連するレベルで実現されるべき、人間の関わる価値の存在があるのを理解することである。出現プロセスでは、いのちを発展させる出現可能性の基礎を置くために膨大な時間が必要だった。出現した後でその基礎を放棄できるというものではない。それは根本的なものであり続け、出現したものを保持する。水、空気、オゾン層を通して届く陽光——すべてのいのちに欠かせない。汚染されればすべてが死ぬ。そこには新たにされた宗教性のテーマがある。この地上から疎外された宗教性ではなく、ここで見つけられるものだ。同様に神の摂理の真の理解は、宇宙の出現プロセスの繊細さの極致について瞑想することから生じる。結局のところ、神の働きにおいて、また神の働きを通して神自身を知ることになるので、地球を熱心に愛さず、大事にしないような宗教性は深刻な問題にある。

2. 1 2 われわれ自身の化学的構成がこの世とつながっていることを尊重すれば、それは食物とわれわれがみなすものにおいて明白に表れる。1953 年以来、農薬と食品添加物による汚染に対して戦ってきた人たちがいる。こうした添加物の多くは動物に対して発がん性があるという証拠にもかかわらず、使用は継続され、食品会社による人間への影響の観察も全く意図されていない。添加物に汚染され、不幸にもがんを発症した人々の技術的「処置」を見つけるために使える予算はある。だが予防措置のためにはないのだ。食べ物や生活のしかたで悪いことを確定するのに技術的「処置」は必要ないというのだ。予防措置は農業関連企業の利益に食い込んでしまう。ダバオの人々が発見しているように、地球が私たちのために作った自然食物のメニューには水銀はない。そのメニューは共存できるものとできないものについて微妙な実験に長い年月をかけて作られてきた。この豊かさから得る食物でなく、多国籍企業が作るいんちきジャンクフードを食べるよう人々は促されている。そうした企業には、地球についての知識はピーナッツの殻につめるよりも少ないくらいしかない。

生態学対環境保護主義

生態に対する意識は以下の知識と関連する。

- 20 世紀は、産業発展、科学技術発展のもたらした致命的危険状況を相続している。
- 長年にわたっていのちを保存してきた生物圏が危機にさらされている。
- 人間という種が継続して存在することは、われわれの関与するいのちの過激な破壊

という状況では当然視できない。

上記の情報は環境悪化の範疇でしばしば提示されるので、真の生態学的意義——および深刻さ——は見失われる。地球を開発の資源として、商品に転換する資源として扱うことに慣れてしまった思考法には、生態の破局という現実のチャレンジは把握できない。あらゆることにまた別の技術的チャレンジを見がちなのである。しかしふれないままにしなければならぬ現実もある——その意味でだけ資源とみなされうるのである。そうした現実とは、この惑星そのもの、太陽、大気である。これらがいのちを可能なものにするので、それを可能にする状況のままに保存しなければならないのである。

生態の回復のための開発計画変更を全く拒否する政府と産業界の指導者には生態に対する意識が欠如しており、世界銀行の人々はその典型である。彼らは一貫して組織的経済活動の外に暮らす人々の利害関係を無視している。そうした人々の問題はまさにその経済活動によって引き起こされているという事実があるにもかかわらず。彼らはエドワード・ゴールドスミス [環境問題研究家・哲学者 1928-2009] の批判に値する (注12)。

「コナブル [第7代世界銀行総裁・1922-2003] 総裁、第三世界の人々が今日貧しいのは、トランジスタラジオやポリバケツ、ペットフード缶が足りないのでも、開発が生み出したその他のごみの不足からでもありません。彼らの中の一番金持ちでもそうではないです。また、村に電気も水道管もないからではないのです。貧しいのは、それはまず彼らの環境が荒廃したからです。魚を捕り飲料水を得る川は農薬など化学薬品で汚染され、伐採業者が森を伐採するので川は急流となり、小川や泉は干上がり、気候を変化させる。輸出中心の大規模農業によって土地が浸食され砂漠化されているからです。」…「(世銀の資金によるプロジェクトは) 銀行、官僚、企業家、技術者、政治家といった一握りの人間たちの短期的な金銭的政治的利益を満足させるだけです。そのような短期的利益は貧窮化させられる人々の長期的利益やニーズとはまったく相容れません。」科学技術的思考にとって、生態上の問題は環境マネジメント改善の問題に減ぜられる。「科学技術の時代は小手先技術についての回答にこだわることで、その時代から発生する問いそのものを妨害してしまうのです。」(注13)

生態を意識するにはもっと多くのことが関与する。その意識は、自分を知ることである地球についての科学的知識の真の意味を見抜いている。この意味を把握し、科学のイデオロギーを愛情欠乏・恐怖支配症候群のための「統制」として批判している。地球についての知識を搾取的な生産最大化に適用する代わりに、いのちを大事にする、その価値を味わい育てる実践を提案する。この霊性は(まことにそうであるが)そこに断絶があるとわかっている。生態上の問題すべての中心にある支配力の精神構造を認識している。人々の地球への関わり方が、他の人間への関わり方として機能することがわかっている。

環境保護主義が支配権力の精神性を持ち続ければ、生態意識は市場価値、権力の価値と決別する。手に負えないほどの政治権力の集中とその権力が仕える破壊的経済から抜け出すのである。そして人間相互関係すべての再構築の要求を受け入れる。それは支配がわれ

われの政治構造、性差別、権威主義的子育て、教育などに入ってくるからである。(注14)

物理的・化学的価値のコンテクストで宗教的社会的価値を語ることは奇妙に思えるかもしれない。しかしこれは人間の不可欠な善の問題である——価値の各レベルでの統合が要求される。真の人間の創造性は、可能にするという可能性を受け入れることから生まれる。可能にする可能性とは、まさに宇宙とつながった身体のことである。

2. 13 現在進行中の種の大量絶滅について例のないことがある。いまだかつてない速度で種が失われているというだけでなく——最近の地質年代のどの時代と比べても400倍以上の速度である——その範囲がかつてないほど広い。以前に見られた大量絶滅では植物の多様性はほぼ残存した。現在その多様性は初めて大部分が滅ぼされている(注15)。多数の人が気付かないが、現代の農法は作物の多様性を減じてしまい、わずか8種の作物を頼りに現在の食糧の75パーセントが供給されている。遺伝子の多様性を失っているので今の農作物は病気にも気候変動にも脆弱になっている。将来、野生の植物種の活用だけが、作物品種をそのような脅威に対して強化することができる。

それゆえ熱帯雨林の消滅にみられる、生命形態の豊かな貯蔵庫を破壊することには自滅的性質がある。

3. 14 最近の研究成果では、われわれが滅ぼしている種の一つについて、他の20種が減んでいるといえるということだ。なぜなら、あらゆる生物は複雑に入り組み、相互に関連し合っているためである。だから生命破壊の範囲について膨大な再計算が西暦2000年を前に求められる。この生命破壊が地球上の人間のいのちにとって何を意味するのか誰にもわからない。しかしこの同じ相互関連性が示すのは「遅かれ早かれ、地球生態系の生命維持機能はかなりの程度損なわれ、人間を包容する地球の容量は急落するだろう。数十年の間か、あるいはたった一年のうちということもあるだろう。そこで人間は滅亡に直面する。」(注16)

2. 15 生命に関わる価値

生命維持に不可欠な価値は健康と力、恵みと活力の価値である。食物、飲料、シェルター [住まい] とケアに関わるものだ。食物がなければ人は死ぬ。こどもたちが栄養不良なら、次世代の人間としての能力は取り返しのつかないほど低下し、生存できるかどうかの課題に直面する。これまでの価値レベルと同様、このレベルは次に来る上位の価値レベルの不可欠な基礎を構成する。われわれは生命維持のニーズが満たされていない人々がどこにあっても無条件に連帯しなければならない。「化粧品や贅沢品を心配するのに、われわれの仲間である地球の住人のいのちを生かすニーズを無視することは、人間のアイデンティティの破壊だ」(フォーク)

しかし現在ある生産拡大と市場勢力を通しての成長「計画」は、基本的ニーズを最優先させることとは反対に働いている。そうした計画は、人間の希望のあらゆる長期的展望を最終的に左右する人間共同体の中心部分を打ち砕いている。

2. 1 6 社会的価値

社会的価値はシステムの価値である。生命維持の価値は持続的に、繰り返し満たす必要がある。たった一回では役に立たない。生命維持の価値を繰り返し満たすことを確実にするのは、体系的な秩序の善である。だから、社会的価値はシステムの価値として定義される。システムの価値は全人口の生命に不可欠な価値が持続的・反復的に満足されるようにする。社会的価値は科学技術的秩序の価値、経済的秩序の価値、政治的・法的秩序の価値にさらに分かれる。

2. 1 6 1 科学技術的システム

科学技術的システムの社会的価値はある人々が生産促進のために使う道具のシステムと関連する。道具は価値中立的で見えないように見えるが、そう仮定することは大いなる誤りになる。われわれは技術社会と呼ばれるところに生活している。その名はわれわれの世界だけでなくわれわれの想像力も科学技術で形づくられるほどであることを示している。

われわれは現在、テクノロジーに深く囚われている。それはわれわれの科学技術的「処置」に対する信頼でわかるし、人間の尺度や妥当性を評価できなくなっていることに明らかである。マンフォード [ルイス・マンフォード、米評論家 1895-1990] とエリユール [ジャック・エリユール、フランスの思想家 1912-1994] によれば、これがわれわれの本当の牢獄である。その明らかなメッセージは、無限の拡大と持続する成長という夢の上に成り立つ技術は資源の有限な惑星には不似合いだということだ。現在の問題解決に適するとして提案される技術を、無批判に受け入れるわけにはいかない。

適切な技術という考えには政府の多くの者が好ましくないという反応を見せるが、それはいかにわれわれが適切でない技術を信頼することでずっと生活してきたか示している。ボパール [1984年のインド化学工場事故]、チェルノブイリ [原発事故 1986年]、チャレンジャー [米スペースシャトル事故 1986年] は、単純な科学技術信仰による現状への満足を揺るがす最近の出来事の名称である。しかし住民主権にかかわる人々は、地域共同体の管理が及ばない技術を次世代のいのちにゆだねることは決してできないと見通している。われわれは科学技術による「措置」への依存を克服しなければならない。

政治的意味合いを超えて、そこには文化と宗教に対する深刻な課題がある。テクノ社会の靈性は、善い創造の象徴をゆがめる二つのシンボルを中心とする。—— 進歩のシンボルは、創造の成就という聖書の願いを、世界支配による人間の無限の進歩に変容させた。

—— 人間の意志を強制する権力のシンボルは、神（その生産のやり方は無限に大切にする方法である）の似姿としての人間という聖書のシンボルを、君主統治者の姿である人間に変容させた。（注 17）

まさに核の大惨事によって現代世界が科学技術を避けるようになるのはあきらかだ。そこで現在の西洋化された世界が生き残るのにたったひとつの選択肢しか残らない——それはこの世界の創造の力がいかにして支配と搾取の方法であるより自然と知識の調和の方法となるかを理解しつつ、その力を受け入れることである。われわれの現代科学で機能する驚くべき創造性はあるが、軍産複合体制に過剰に利用されることでたいへんわかりにくくなっている。このような現代の無制限な物質的成長計画に従うことが可能になるのは、その計画が地球と人間の精神に対して行うことを構造的に忘却し、心理的に抑圧してしまう場合だけである。真の科学技術的価値は、地球とその人々のいのちの価値にどれだけふさわしいかということによって定義される。

2. 162 経済的価値

経済的価値は全人口の生命維持ニーズを適切な反復方法で満たし得るシステムにおいて実現される。そのような規範的な定義を考案することは、現在の世界で経済的価値が実現されていないのを指摘することである。

2. 163 政治的価値

自己統御する市場への資本主義的な信頼を強く訴えるにも関わらず、経済システムはその性質のため、変動する状況に自ら適応することができない。政治システムの価値が見つかるのは、変動状況の必要を充足するために経済システムが必要とする調整を確実にする体制である。政治システムによる経済のこうした統制は、経済システムが変化する状況においても全人口の生命維持ニーズを満足し続けることを保証する。

2. 17 文化的価値

現代の創造的な社会運動のすべては一点で一致する。それは国と市民社会の関係の性格を変える必要である。人々の自分の運命に対する支配の回復は、文化的価値を実現することである。合意に基づく政府がなければ内的暴力を助長する傾向と、介入政策への口実が用意されてしまう。「さらに平和な世界を築くための闘争の核心には、統治の全問題がある。」(注18)

フェミニストの側面

ありきたりな言い方にだが、機械的な文化モデルはあらゆる工業化社会を支配するようになった。しかしギブソン・ウィンター [米社会運動家・聖公会司祭1916-2002] はここでも複雑性を指摘する。つまり科学技術社会は、政治経済組織の機械的形態のイメージをもって機能するのに、家族・宗教・对人的共同体での男性支配という有機体論ヒエラルキーを保存しているという。それゆえ性差別的抑圧は、伝統的民族を脅かす——ついには世界中のわれわれすべてを脅かす——工業社会の構造に不可欠となる。(注19)

抑圧的統治の経験はあらゆるレベルでの関係の文化的パターンに根差している。鍵となるフェミニスト的認識は政治と日常的にどう関わるかということと関連する。「ポーランド

の自主管理労組「連帯」を代表して、アダム・ミフニク [ポーランドのジャーナリスト 1947ー] は雄弁に説明している。市民が [政府に対して] 誠実・公開性・信頼に固執することが、最も恣意的で権威主義的な政府の支配を弱め、制限するという。特にそうした姿勢が戦闘で叩かれる場合、つまり徹底抗戦だが、その場合少なくとも潜在的な可能性として死または投獄の危険をも冒す誠実な行為への献身を表しているのだ。」(注20)

住民統治に非常に関連する女性の活動から出現する構造は以下ようになる。

- 開放性とあらゆる関係についての信頼
- 承諾
- 法の尊重
- 公平さ

さらに加わる資質としては、穏やかな怒り、個人崇拜に対抗するリーダーシップの共有、個人的関係と公的議題の間の不鮮明な境界、伝統的権威役割についての公平無私、ヒエラルキーの忌避、闘争の主な道具として歌、踊り、祈りに頼ること、である。

女性の運動について詳細に述べたのはまさに文化的価値に関わることの定義を記述するためである。文化的価値は、人間が自分の生きる意味と価値、自分の世界を形づくる意味と価値を決めるプロセスにおいて実現される。このように表現されると、上記で文化の弁証法として言及されたことが人間の自由の原動力の中心であることがわかりやすくなる。人が自分の世界を名づける権利を放棄するなら、この世界をどのように形づくるか自分にかわって他人に定義してもらおうのなら、自分が自身の運命の主人であることをやめてしまうことになる。(注21)

共同体の力は、文化的価値の母体である。上記に詳細を述べた女性組織の性質を一瞥すれば、その諸組織で機能するのが共同体の力であると示すのに十分であり、その力は、共同体参加者を自由と、開かれた誠実さにおける責任へと奨励する。まさに同じ力学が、キリスト教基礎共同体 (Basic Christian Communities) を社会と教会の両方で解放された領域としている。

政治はその基礎構造に属する

文化的価値を政治的価値の上に置くという主張をするのは、健全な社会にいる人々は自分の究極的な支配の権利を国家に明け渡すことは決してないということである。それは政治制度が社会の基礎構造に属すると主張することである。これまで説明した価値の秩序を見れば、われわれの世界の大きな混乱がさらに明らかになる。本当の順位が逆転しているのは次の点である。(i) 政治システムはわれわれの社会の経済システムを支配していない。

(ii) 政治システムは経済的利益によって支配されるので、文化の原動力を社会の意思決定の重要な地位から立ち退かせている。このような二重の逆転のもとに、政治は文化的価値を技術・経済システムへ橋渡しする装置となる代わりに、高圧的プロパガンダとなって一般大衆に今のシステムがもたらすものこそ必要だと信じ込ませようとしている。

2. 18 個人的価値

文化的価値を実現する条件は、社会参加する個人の創造力が本物と信頼できることだ。技術的に形成された想像力は常にこの基本的な真理を避けてしまう。(支配的な国の道具を受け継いだ) 高圧的権力こそ人間の苦しみを癒すことができると信じる人も同様である。人々の感じること、知ること、行うことに真正さがあるなら、文化的価値は成長する。これが前述のアダム・ミフニクの引用の趣旨である。

2. 19 宗教的価値

生きること全般における信頼性の保持は、無条件に肯定するという経験なしには不可能で、宇宙の中心にある神秘がわれわれの味方であるとわかっていなければ不可能である。この論文は当初、はっきりとキリスト教信仰をもつ人々に向けていたため、第一部のテーマは、ユダヤ・キリスト教信仰の核心、つまりその神秘が歴史上どのように現存するかという理解の解明であった。この宗教的知識こそが、巨大な困難にたいして弱々しくも立ち向かう力を与え、憤り・嫌悪・暴力の只中にあっても創造性と癒しのため全力を傾けさせ、個人的失敗にもかかわらず誠実であり続け、生きた希望を持ち続けさせるのである。

結論

この本はいわゆる青写真ではない。他の多くの人々と同様、世界の問題の解決策であると知識人が主張するでっちあげの壮大な計画などを、私は信じない。

ここに示した事柄は穏当なものといえる。人間の善を説明するための基盤を概説しようとしたのである。このモデルに対する支持は、現代の人間生存という挑戦への回答、創造性ある回答の中に見つかると感じている。このモデルの実現こそ大事なのだ。私の願いは、その実現のために専心しようという人々に、なんらかの助けを用意できればということである。

このモデルの価値は、完全不可欠という性質にある。宗教的レベルでのわれわれの時代の癒しは、決して生じるべきでなかった二分法の克服が主である。最近の状況を表すのは、「地球の霊性 (earthuality)」ではないスピリチュアリティ、[人間以外の] 他の被造物を含まない神の国を願うこと、信仰の神秘政治的構成の感覚を喪失していることである。このモデルはあらゆる価値レベルの相互の関連性をわからせる。各々のレベルがどのように他の価値レベルすべての実現に関わるかがわかる。

このモデルは、こどもたちの広範な栄養不良が宗教的信仰にとってチャレンジであり、文化的価値に実現された個人の真正さが政治を人間らしいものにするためにどのように必須か、われわれが理解できるよう招き、励ましている。そして「創造の完全統合性」という言葉がどのように適切な分析展開を受入れるか、そして(宗教的価値である)信仰と(社会的価値である)正義がどのように互いの仲立ちをするか理解できるようにさせるのである。(注22)

脚注

1. マシュー・L・ラム、「共同体と帝国の政治的弁証法の中のキリスト教」『メソッド』1983年春号、p 1

2. パブロ・リカルド『偶像に対するわれわれの闘争』「序文」(C.S.R.C., オザミス・シティ1984) pp. i i - v

3. チリ軍内部に近年見られる、急進的で人為的な原理主義者の形式の宗教についての興味深い文献は以下参照。ケネス・アマン「神のために戦う——チリの軍隊と宗教」『クロス・カレンツ』1986-87冬号pp 459-466。「ピノチェト將軍でさえ、堅固なカトリックであるという自身の主張にもかかわらず、もうひとつの『霊的シェルター』を見つけた可能性を示唆するのかもしれない」

4. 『秩序と歴史』第1巻「イスラエルと啓示」(バトンルージュ、ルイジアナ州立大学出版社1956) p. 501

5. バーナード・ロナガン『サード・コレクション』1985、pp. 102-103参照。

6. 問題はかなりの期間、見られた。他の考え方にはいわゆるフランクフルト学派の批判理論がある。そのおおまかな特徴は、文化分析の様々な形態に由来する批判的範疇、特に心理分析によるものをその分析に含むことで世界を変えようとするマルクスの批判的意図を継承する試みといえる。この理論には、西側諸国の労働者大部分が実際の利益追求において断固として非革命の姿勢であることを省察してたどりついている。この学派の思想家たちの関心は、文化的であるもの、言い換えれば人間の生産物がどのように「自然である」と見られるようになるかに焦点を絞る。そこにはまさに科学の理解、自然の「支配」なども含まれる。その目的は社会的なものが絶対化されないよう解明することである。

フーコーの複雑な調査には統一要因がある。それは権力のかつてないほどの繊細で広範囲なパターンと表明の分析である。この著作を読んだが、権力と支配の形式がわれわれの日常意識のすべてに浸透していること、当然と考えている人々が関与するつながりのすべてのパターンで働いていることを強調している。この観点では、抑圧の異なる形はないし、ありえない。経済的破壊、性差別、人種差別、政治的経済的抑圧、大量消費主義はすべて、われわれをより効果的に支配する権力の互いに連動する様相である。それほど効果的なのでわれわれは抑圧をひとつの構造の中にだけ限定、特定しようとしてしまう。「自然」であるとか支配権力の「手の届かない」といったように思っているすべての文化的価値に関していえば、自分自身の意識がどれほど疑わしいものになっているかわれわれは気を付けなければならない。以下参照。ミシェル・フーコー『狂気と文明』(ロンドン Tavistock Publications 1971)『監獄の誕生』(ハーモンズワース Peregrine Books 1979)『権力、真理、ストラテジー』(シドニー Feral Publications 1979)『権力・知識—インタビューと著作1972-1977』(ニューヨーク Pantheon Books 1980)

最後に同じ問題に関することとして次の点を述べる。(i) 上記の序文に言及した、過去二十年のカトリック教会の社会的教説における発展のかたちと(ii) 一般大衆の宗教性に関しての解放の神学における強調点の変化である。曖昧さにもかかわらず、それは解放プロセスに決定的とみなされるようになっており、創造的な文化的重要性が信仰をどのように広める際にも存在することを示唆的に認める。以下参照。拙著「宗教と大衆の宗教性」『Asia Journal of Theology』Vol.1, No.2, 1987年10月 pp. 477-485所収。

7. B. ロナガン『セカンド・コレクション』(フィラデルフィア、ウェストミンスタープレス1974) pp. 165-187参照

8. B. ロナガン『神学の方法』(ニューヨーク、シーベリープレス1979) p. 240参照

9. フレッド・ローレンス「ベーシックコミュニケーションの要素」ロナガン・ワークショップ第6巻1986 pp. 127-140。ローレンスが強調するのは、道徳的回心で問題になるのが真の人間性の出現ということである。人の出現というのは他人に向かう真の慈愛のうちに自己超越する能力が実現されることにかかっているとみられる。「個人的利己心、階級的・国家的利己心に基づくような、理性以前あるいは理性以下の基準という制限のある、選択に値する目的の範囲をもつ人は誰でも、自分の住処に留まる一匹の動物のようなものである。たとえ当人による特定の善の実現計画がどれほど巧みに考案されているとしても。」

10. B. ロナガン『閃き』(ロンドン、ロングマン1957) pp. 228

11. R. ドーラン「精神的回心から弁証法へ」p. 99

12. 「世界銀行総裁コナブル氏への公開書簡」『エコロジスト』Vol.17, No.2, 1987 pp. 58-61

13. G. ウィンター『創造を解放する——宗教的社会倫理の基礎』(N.Y. クロスロード1981) p. xi.

14. 私は『死の前の生 (Life Before Death)』の最終章「歴史の発生の鼓動 (Genetic Throbbing of History)」pp. 77-97でこれについて展開を試みた。また、マックドナー／ブッシュ『蜃気楼としてのわれわれの未来』(Q. C. Claretian Publications 1986) pp. 1-11も参照。

15. 『エコロジスト』Vol.17, No.4-5, 1987 pp. 129-133参照

16. 『エコロジスト』Vol.17, No.4-5, p. 130に引用されたポール・エーリック、アン・エーリックの言葉。

17. ギブソン・ウィンター『創造を解放する』pp. 116-117参照

18. リチャード・フォーク『平和と正義への開け』p. 31

19. 『創造を解放する』p. 25

20. R・フォーク『平和と正義への開け』p. 24

21. 『死の前の生 (Life Before Death)』pp. 5-15、87、90-91参照。

22. モデルの持続的な具体的実施法の説明については次を参照。ジョン・ボイド・ターナー「フィリピン北サマル州の開発の例」フレッド・ローレンス編『危険な記憶を伝達する——政治神学での探測』所収（アトランタ、スカラーズ・プレス1987）pp. 109-241